チートに「無敵結界」をお願いしただけなのに、なんでなの？

魔王パワーで無双したい人

【注意事項】
このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】
テンプレな神様転生で「無敵結界」をお願いしたら、ダルマ（四肢欠損した状態）になってた。
ついでに男から女になってた。
これで終わりかと思ったら、天の佑けか、地獄の使者か。
いや地獄の方の使者だな。
ナイチサが現れ、いきなり魔王継承されて自分が何に憑依したのか分かった。
魔王ジル。その魔王になる直前で憑依か、もしくは前世を思い出したかしたんだ。
体の主導権は無くなったけど確かに「無敵結界」はついた。

え、……ナンデ？

目　次

0．プロローグ ―――――――――――――――――――――――――――――――― 1
1．復活したけど緑の人が目の前にいる件 ―――――――――――――――――― 5
2．目の前に食事が並んでいます。ああ。女の子と男の子が並んでいるな ―――――――――――――――――――――――――――――――― 14
3．命乞いとか、魔王のくせに恥ずかしくないの？はい、命乞いしてるのは私です。 ―――――――――――――――――――――――――― 21
4．ルドワールドから逃げれても、ＡＬソフト世界からは逃げれない様だ ―――――――――――――――――――――――――――――― 29
魔法少女まどか☆マギカ編
5．こんな敵だらけの世界に居られるか！私は帰らせてもらう！ ―――――――――――――――――――――――――――――― 37
6．【急募】今学校の屋上なんだけどさ。施錠された学校から飛び降りないで出る方法教えろください。 ―――――――――――――― 46
7．『我が名を聞き、生きていることに感謝せよ。我は五代目魔王ジル。お前に絶望をくれてやろう。』なんて名乗りはどうだろうか。…うん。却下で ―――――――――――――――――――――――― 54
8．宝石（マミ）が、ただひたすら煩い件 ―――――――――――――――― 64
9．ククク…これは魔女化が早まってしまうかも知れないな。 76
10．「へい、お待ち。グリーフシード丼ソウルジェム和え一丁あがり。」 ―――――――――――――――――――――――――――― 90
11．白いの「魔法少女の願いと祈りによって生まれ、呪いによって強化された存在。それが君だ。」…コイツ何いってんだ？ ― 99

１２．「条件４・今より一週間、別の地域で休養できる環境を整えるので、そこで休養し、そこから出ない。ステルス化もしない。」ほう、本編に関わるなと言うことか ―――――――― 110
『魔法生成生物についての報告書Ｎｏ．８』 ―――――――― 118

0・プロローグ

おはよう諸君。
まあ、聞いてくれ。
なんの変哲もない、ごく普通の一般人だった訳だが、何かしらの事件か事故で死んだ。
死因は思い出せないが、まあ、思い出しても楽しいことにはならないだろう。
さて、それはそれとして死後、そのまま天国なり地獄なり無に帰すなりがあると思っていたのだが、テンプレの神様転生でチートが貰えるようだった。
なので「無敵結界」をお願いしたんだ。
これならば無難に無傷な人生送れそうじゃない？
で、そのチートは了承された。されたのだが…
いま？

ああ、明らかに色々な暴行された後、両手両足切断されて、
草原の真ん中に捨てられましたって状況だ。
その状況で目が覚めた。
・・・え、これなんて絶望？
無敵結界なんて無い。あっても食い殺されないだけで餓死確実。
コレ死亡2回め突入なんじゃないかな。
存外、この状況になって絶望し、心だか魂が死んで自分が憑依したか、または前世な自分が出てきた。
その辺りじゃないかな。
＼もうだめだーー！／
さて、絶望すること約半日。
朝日のある頃に意識があったわけだが、今は日が沈みそうです。
身動きったって痛くて取れない。
じわじわと死んでいく様に焦燥感だけが募っていく。
だが、なにも出来ない。

仕方ないので肉体の持っている記憶を思い出せるか試し、それは達成された訳だが。
うーん…
うーん？
なんか、この世界変だぞ？
そう思っていると、上から声がかかる。
「居たな、我が後継者よ。」
は？何言ってるのこの人。
チラ見すると…あれれ、どっかで見覚えがある。
肉体の記憶には無いが、主観の記憶にはある。
つまり、え？
「もう時間がない、この場で継承する。」
返事する間もなく。
黒い何かが自分に入り込んでいった。
意識は一旦ソレで途絶えた。

はい。目覚めました。目覚めたが…
肉体の操作権がなくなり黒い手足が使えている自分が居る。
いちおうは自意識というか魂というかは吸収されたり破壊されたりしないように頑張っているけど本体は、心の死んでた前の心＋異物で形成されていて主導権は無い。
自分の心が相手には認識されていないのは、反抗して主導権争いをしていないからかな。
ん？無敵結界？ああ、使えてるよ。
魔王になったからな！
ご存知の通り、先程継承したとかいうのは魔王ナイチサで、四肢欠損中の自分を強引に継承させたというわけだ。
時間がマジで無かったらしく、日が沈んだら血に飲まれる所だったとか。
いや、勇者にやられてヤバかったとかじゃなかったっけか？
時間はまだあったはずだが…

それはそれとして魔王の血の力はマジ強大で、矮小な自分の精神などいくらでも食い破られる。吸収されてしまう。
そして前世の恨みとか魔王の血がいい感じにミックスされ魔王ジルという人格が「魔王の血」主導で形成されてしまったわけだ。
自分がジルの中にある前世なり憑依なりの魂であるなら、本来主人格は自分なのだが、ジルの恨みつらみは強く、魔王の血には太刀打ちできなかった。
たしかにさ、無敵結界欲しいって言ったけど。せめて魔人になる程度にしてくれればいいのに、なぜ魔王にされちゃうかな。
魔王なら、まだ美樹憑依のがマシだ！
ヒラミレモン買い占めてでも対策考えてやる！
嘆いていても仕方がないがやることもない。
だがチャンスはある。
１０００年後に魔王の血は５％になる。
１００％の血に勝てなくても５％に勝てばいい。どうにか吸収できるようにしたい。
つまり、修行だな！
何、時間は１０００年ある。５％に勝つべく頑張ろう！

―１０年後―
そんな事を考えている時期が自分にもありましたっと。
ああ、なんていうかね。残忍すぎ笑えない。
最恐の魔王っていうのは伊達じゃないね。
たっぷりと残酷で残忍な事を目の当たりにしましたとも。魂食われるかと思った。
だが人間慣れるものである。なんとかなってる（震え声）
１０００年あれば慣れるのかなこれ。

―約１０００年後―

ついにこの時が来た。
魔王永続化中での割り込み。
ジルの敗北にして魔王の血の移動だ。
さようなら９５％
よし、５％め覚悟しろよ！
と、体が動かない中、主導権等や魔王の血を喰うのに夢中で気づかなかったが、気づいたら封印の中だった。
あれ…
意識は闇の中に落ちていった。
くそう…だが１０００年あ…
Ｚｚｚ

―更に約１０００年後―

主導権を取り戻し、無敵結界も魔王パワー５％もある
世界ランキングで言えば上位の自分が復活したのである。
たぶん。

1．復活したけど緑の人が目の前にいる件

やあ、神様転生したジルに憑依した人だよ。
今ね、２０００年ぶりくらいに主導権が戻ってきたんだ。
手足が真っ黒の魔力で作られている以外は何も付けていない。
真っ裸だ。
そして、復活したてだからだろうか、宙にふよふよ浮いている。
・・・なんで？
魔王パワー５％も吸収済みである。この辺はなんで吸収できたか分からないが、きっと自分の頑張りが良かったからだろう。
「ジル様……おおお。ジル様、ッ……！
この時を、いくら待ったことか……！」
知らんがな。てか、魔人ノスか。
ヤバいなぁ。
魔王時代のいい思い出も併せて、また素晴らしい人間牧場時代を築こうとか思っているのかな。
普通に暮らしたいのになぁ。
「ジル……って……！」
「く、くは、くはははははははは
こちらの方こそが先代の……
真の魔王……ジル様だ。」
ヤバい、体に力が入らない。
このふよふよ浮いているの終わったら倒れるんじゃないか。
腹も減ってる。１０００年程何も食べてないからな。
あー確かこの後城のやつらから精気吸い取るんだけど、全然たらないとかなんとか。
そんな事より飯が食いたい。
あと魔力っていうかＭＰ足らない。
「千年前の……魔王!?……これが!?」
昔あった圧倒的な魔力とは言わない。５％程でいいから回復したい。

いや、今のリソースが手足に食われているのも痛いが。
つか、なんで体縮んでるんだコレ。
「あのガイめに施されたカオスの封印……
この地に国なぞ作ったリーザスとやらの
奇妙に強い血の封印…」
年取ると背が低くなるからかな。
つまり、俺はロリのボディーを手に入れたぞ！
まあ２０００年前から知ってた。
「ふん。結局は力では解けなんだわ
解く資格を持つ者を動かすしか手はなかった。」
「そんな……」
あー、で周囲の状況はどうなってるんだ。
体が怠くて動かない。ヤバいな。レッドアラートだ。
カオスが居るから、ソレで攻撃されたらヤバいんじゃないか。
「わざわざ、魔人だと触れ回り、
直接に貴様らを追い詰めなければ
カオスに縋ろうともしなかったであろうな。」
寝起きでぼーとする。
って、自分復活してから息してなくない？
そら苦しいわけだ。死なないけど。
すぅ…はぁ～
１０００年ぶりの空気、うめえ。
「うっ…」
「リア様！」
…なんで？
臭い酷かったのかな……。
「おぉ…しかし、ジル様……そのお姿。
本調子ではあらせられぬご様子」
縮んでるからかな？まあ省エネモードと思っておこうか。
いや手足のコレ供給止めれば少しはマシになるだろうけど、手足がないのは駄目だし、悩ましいね。

「さあジル様いかがなさいますか。
ノスに。このノスに、ご命令を！」
しっかし、ノスどーしようかな。
部下は欲しいが、狂信者は要らないんだがなぁ。
浮くのが終わって地面に到着。
意外と普通に立てた。
歩行に支障が無い事を確認する。
だるいけど、なんとかなる。
すると微妙にすえた臭いが鼻についた。
コレなんだろう。ノスの加齢臭かな。
自分のだったらヤダな……
「……臭いな。」
自害でもさせたら面白そうだなぁ…っとそんなふうな事思っちゃうのは魔王時代の影響か。
慣れたっていうか、スレたっていうか色々あったからな。
あーどうしようかな。
細かいところは覚えていないんだが。
ああ、別に同じにする必要も無いか。
「ま、待てーーい！　待て待て待てーい！」
あ…
公式チートだ。才能限界レベル無しで、レベルマックス状態の女を抱くと才能限界が上がる。…と。
「……カオスで封印してたなら
しなおす事もできるだろう！
そしてお仕置き！　これだ！」
いやーマジでバカ理論。
生で拝見できるとは。（チラ見）
「ちょ、ちょ、ちょっとちょっとランス」
「あぶ、危ないです、ランス様！」
だが、こいつは活用できる。

今Ｌｖ５００が最大のハズだから、それを踏まえて活用すればＬｖ１０００も可能という事。
ふむ……、イイネ！
「がはははは、くらえ!!
峰打ちランスアターーーーック！」
ランスが、峰がどこだかしらんが攻撃を仕掛けてくる。
うーん。ＬｖＭＡＸになるまで待ってもらえんかなぁ。
いちおうオルケスタ（自動レベルアップ）は開けるはずなので。
「下郎が……！」
「お……こ、こいつ……！」
ノスが邪魔で見えないけど、カオスを握って折っちゃったりするのかな。
「カオスがあれど、
貴様ごときにジル様に……」
どうしよう。原作重視でノス倒されるまで待つ？
それとも、ここで…いや、カオスが本調子じゃないし無理かな。
ていうか、体力回復しないとカオスの攻撃受けたらヤバい。
再封印も異空間漂流も嫌だなぁ。
うーん。とりあえずは原作重視で良いか。
「ふう、カオス折っといて。」
と、原作より口数多く命令を下す。
「はっ承知いたしましてございます」
声に喜色があるぞ、このドＭが。
「ぐっ、……ええい離せ……！」
がんばれーランス～。
「魔を傷つける力
奴らの手に渡れば疎ましき力……
ジル様を「いいからヤレ」」
ノスの言葉に割り込んで命令を下す。
いちいち、煩い。
「も、申し訳ございませぬ。」

いちいち振り向いて謝罪する。
ノスさぁ、そういうのも良いから進行させろよ。
どっかスキップボタン無いかな。
バキンと金属が砕かれる音がし、人間の皆さんが右往左往する。
「あ、あっ……あああぁッ！」
「どわっと、と、とととと……！」
折れるのは予定調和。
「なっ…なにーーーー！」
この駄剣どーしようかな。
ああ、逆に封印してしまうのも良いかも知れない。
どうせ直るし。
「あ、おいこら」
うーん。しかし、ここでカオスなしというのも可哀想だ。
放置するか。
「ぐっおおおおおお……!?」
「ランス様」「いやー！ダーリーン！」
あ、当たってた。
なんか知らないけど気づいたらランスが吹き飛んでいた件。
「他の者はどういたしましょう。
捨て置くのですか？」
うーん。原作なんて答えてたっけ？
うーんうーん。
案としては…
①「腹が減った」→「ではこやつらを食事としましょう。」
はい駄目。
②「良い捨て置け」→「ははっ」
これはこれで有り
③「厨房から何か持って来い」→「ははっ」→なぜかメイドさんとかが持ってこられる。
はい駄目駄目。
④「こいつで腹を満たそうか」→ランスとヤル。と、いまはその時

ではないし、そんな体力無い。
歩くので精一杯だ。
てか、この体でエロいことするのに抵抗を感じないのは、魔王時代に魔王の血の方がハッスルしたからだな。
精神的には男の筈なんだがなぁ。
あ、女性は元々好きだし今もイケるからバイ??
「……ククク
かしこまりました。では、そのまま。」
あ、…え？
……ま、待て！一体何をかしこまったというのだ!?
とはいえ、想定通りの方向性だ。良しとしよう。ふう。
よし、とりあえず原作通りノスが死ぬまで進めようかね。
そうと分かれば、飯だメシ！

彼らを尻目に部屋から立ち去ると、前の方から別の奴が近づいてくる。
……誰だっけ。
ああいや、アイゼルか。
「……!?
ジル、様……っ……！」
アイゼルも使徒も跪く。
１０００年前と変わらぬ対応。ありがとうございますよっと。
こういうのも慣れてしまったなぁ。
「くくく、アイゼルよ。
ようやく……思いは成ったぞ。」
ああ、ノスごめんよ、今は中身ポンコツなんだ。
「ええ、ノス……
あなたの執念の勝ちですよ」
あーなんだっけ。
確か人類寄りの魔人だったよね。また暗黒の時代に戻るとか思われてるんだろうなぁ。別に良いけど。

あ、でも3使徒は可愛いので欲しいな。
「もはや、ホーネットに……
ガイの娘なぞに従う素振りも必要ない。
真の主に忠誠を捧ぐ時が戻ってきた」
繰り返すがポンコツでごめんよ。それより腹減ってきたな。
「そう……ですね。
選択肢も無い話です。」
ぬ？ティンと来たぞ!?
「ガイの……娘？」
!?申し訳ございませぬ。
ガイの話などご不興を被る話を致しまして
申し訳ございませぬっ……。」
跪いて謝罪するノス。
いちいち大げさな奴だが、確かにジル時代の事であれば仕方ない。
いつもこんな感じだった。
「違う。ガイ……どうなった？」
「は、奴めがジル様を裏切り封印した後、
畏れ多くも奴めが魔王となりました。」
「……うむ。」
ほら、相槌打ってやったんだから先をはようはよう。
「そして奴は何を思ったか人間の世界と魔物の世界を分け、自らは西に居を「娘の話」ハハッ」
話が逸れたので割り込んで修正する。
「奴めが魔王の時に何人かを仕込み、
生きて生まれたのがホーネットでございます。」
「……ほう」
「やはりガイの娘なぞ生きているだけで腸が煮えくり返る想いでありましょうが、このノス「生まれた時から魔人か？」ハハッ……」
めんどくさいから割り込んでるが、コレほっといたらいつまでも喋っているんじゃないか。
「ホーネット。ヤツの娘は生まれたときは魔人ではございませんでし

た。」
そう答えて、私の反応を待っているようだ。
「……魔王でも子を産めるのか……」
「は、そのようで……」
よし、ひっぱったがコレで誘導できるぞ。
「いいなぁ……」
そこで、くーと音が鳴る。
ああ、私のお腹の音だ。腹へってるんだ。マジで。
「クッ……クハハハハハ！
ジル様。まずは食事でございますな。
私めに心当たりがございます。
おみ足に障りましょう。失礼致します」
そう言うと、ノスが私を抱える。
すげえ、高価な壺でも持つみたいに慎重にやってるぞコレ。
すぅっとアイゼルを見るとビクッとした。
あ、おもしろい。
いやー主導権戻ってきたのに全然自由にならないな。コレ。
主に魔人の目がひどい。
あと真っ裸なのは魔王の血Ｖｅｒのジルなら良いけど私は駄目だな。
なんか着たい。
え？駄目？いや着たい。が、ノスの前では無理だなコレ。
しかし、ここらで命吸って回復させるのっていうのも、まあ良いが。
印象が悪くなるのは駄目だ。
どこか別で調達したい。何かないかな。
異界ゲートがあるじゃないか。
ちょっと異世界で調達したりしようか。
よし目標は定まった。
・ＬｖＭＡＸにする。オルケスタ使用。
・そのために、ある程度魔力とか生命力とか回復させる。
原作で命とか吸うの足らないって言ってたけど理由わかったわ。

なんだよ最大ＨＰとか3億あるんですけど、コレで5％なんだよねコレ。
現在のＨＰが３０００前後。復活時に３０００程回復してた。
ん？自然上昇？無いよ。
寝るとか食事でたぶん1万とかにはなると思う。
足らん。全然足らんわ！
って、ほんと足らなくて、叫びたくなる気持ちもわかる。
しかも現在Ｌｖ１００くらい。あと４００くらい上がるんですがコレどうすんだ。あ、オルケスタるのか。
命削るっていうのは文字通りＨＰ削りながらオルケスタ開くんだけど、
あと才能限界レベルとか、どうにかしたい。
具体的にはランスのシステムで頑張って延々と上げたい。
オルケスタ→ランス→オルケスタ→ランスって感じでやれば一日１Ｌｖ　は上がるだろう。
まあ、その前に人類と和解しなきゃ（震え声）

2．目の前に食事が並んでいます。ああ。女の子と男の子が並んでいるな

こんばんは諸君。
まあ、聞いてくれ。
食事を用意しますと言われて玉座のような所（※ホンモノの玉座です。）に座っていると、２０名くらいの男女が入ってきた。
メイドさんとか執事とか兵士とかコックみたいな格好の奴も居る。
全員、ブルブルと震えており大変嗜虐心をそそる。まあ、旧ジルなら愉しんで苦しむようにして殺すだろうが、私はそんな事はしない。
あと、コック殺したら飯が食えないじゃないか。
とはいえ、ここで変に旧ジルと違う動きをするとノスがどう動くか分からなくなる。
面倒だし食事もままならない。
つまり、旧ジルをロールプレイしつつ効率よく、かつ心持ち気持ちよく回復しなければならないわけだ。
となると、犠牲者が出てしまうのは致し方ないか。

「……ジル様。まずは少数ですがお召し上がりください。
今もっと集めておりますゆえ。」
ロールプレイロールプレイ。
それを考えると１０００年間旧ジルの動きを見続けていたのは良い。
どう動くかはよく分かる。
あと無口系だから応対も楽ちんだ。
「ひ、ひぃ……」
おもむろにリーザス兵。（捕虜かな？）に近づくと、噛みつく。
ちゅーちゅー吸う。
ああ、なんか魔王って吸血鬼系だよなぁ。
「あ……が……ごぉ……」

ここで旧ジルならば、助かりそうで死ぬあたりで吸血を止める。
だが私は止めない。
腹も減っているし、精気も足らないし色々ヤバいから一気にやる。
…えっ……回復したＨＰとＭＰ、１００も無いんだけど。
「……不味い。なんだこの薄い精気は。」
「申し訳ございませぬ。しかし人間などいくらでも居りますゆえ、数はご用意致します。」
「……食料庫から飯をもってこい。……食べて寝るほうが回復する。」
「……ははっ……承知いたしました。」
特に反論無くノスは食料庫に向かう。
……人間たちを残して。
ああ、つまりコレは食い散らかして良いよって事なんだろう。
難儀だ。
旧ジルと違って虐めたいとか壊したいとか無い。
倫理観は旧ジルに壊されたし慣らされたので、やれなくはないが。
あと何気に、主導権取ってから初めての吸血だったわけだが、なんというか気持ちよかった。
コレは確かにハマる。
相手の反応も愉しめるし、こりゃサディストはご馳走になるなぁ。
さて…
人間たちをチラ見すると、生まれたての子鹿の様にブルブル震えている。
床も濡れているのがちらほら。
恐怖とか何かで逃げれないし動けない。
まな板の上の鯉か何かな状態だろうか。
「……」
じーーーと、コックを見ていると、気を失って倒れた。
……解せぬ。
「……そのコックを起こせ。」
言うと両隣の者がビクッとしたあと、足で蹴り起こす。

なんでだろう。
……ああ、屈むと、もう立てないのですね。

暫くすると起きるコック。
「……」
起きてこちらを見てビクッとする。
話が進まない。まあ話してないが。
「……料理を作ってこい。」
仕方ないので、命令を一つ発する。
「は！はい！たたたた、ただいま!!!」
弾かれたように立ち上がり、逃げるように厨房へ去っていく。
残された者たちは、羨望の眼差しで彼の者を眺めていた。
「……テーブルと、椅子……ソレとコレを片付けろ。」
旧ジルよりは活発に命令を発した。
それを受けて残りの者たちは、慌てて動き出す。
てか、ノス何処行ったし。
自分で行くなよ、人間に命令しろよと。

暫く待っていると、ノスが帰ってくる。
「……おや？……随分綺麗ですが、お気に召さなかったでしょうか。」
ノスが大量の肉を持って帰ってきた第一声がソレだ。
「……私の体力は、今０．０１％以下だ。
……まずは食事をし、……休憩を摂らねば、……動く事もままならない。
あと何だ、その肉は。焼いて持ってこい！
食いやすいよう一口サイズにしろ！」
衰弱している奴は、胃がビックリしないように、普通は食べやすいスープとかからなんですがね。
まあ魔王だし普通じゃないから違うんだろうけどさ。
「なんと！このように多弁に…それほどまでにお怒りとは。

このノスが不明でございました。
今！今お持ちします！」
いったい何の茶番をしているんだ？
コレ実は原作だと回復してるっていうけど、効率は全然良くなかったんじゃないか？
ああ、もう！
原作は原作。もういい。
食って寝る。これでＨＰ１万にはなるはず…なってくれ！
人間から吸ってたら、一人あたり１００前後で、つまり１００人は吸わないと１０時間休憩分にはならんと言うことだ。
で、この城何人残って居るの？
１０００は居ないんじゃ無いか？
つまり一気に吸っても１０万。だが食って寝ればだいたい一週間あれば回復する。
あれ？それじゃランス達来ちゃう??
ゲームだとその辺りの日数は進行度合いとレベル上げに依るからなぁ…
……
まあいいや、考えるのも億劫だ。
とりあえず、カオスを直してアイゼル殺してから来るだろう。
おお、そうだ。アイゼルをカナリヤ代わりにしよう！
アイゼル死んだら教えてねって……
……誰に聞けば良いんだ？
……
Ｚｚｚ
あ、寝てた。あいつら一体何処まで行ってんだ。はようご飯持ってこい。
あとベッド寄越せ。横になって寝たい。

諸君。おはようございます。

食って寝るのはなんと清々しい事か。
一晩で1万は回復すると言ったな。それは嘘だ！
5万ほど回復してた。
いやあ想定以上に回復してたわ。
まーそれでも1％行ってないんだけどな。
異界の門とオルケスタ開くのでだいたいＨＰ１０万は無いとやってけないので
それくらいを見ています。
あと自然回復ですが、あります。
1日に1回復する事を思い出した。たぶんあってる。
……
ＨＰ０とかで、異界漂流して、異界の門開くのにＨＰ４万は居るから…あいやＭＰ０だとＨＰから使用されるからなんだけどな。
ＭＰは自然回復しない。いや魔力が漂っていると回復はするようだ。
濃さに依る。
ただし異界の門内だと回復は難しい。
となるとＨＰからの転用になる。１０９年…回復にかかる。
原作で戻ってこれない訳だ。あーランスって１００歳くらいで死んだよな確か。
てか、ランスたちが来る前にオルケスタってから戻り、戦えば普通に勝てる。
うん。
魔王なランスがランスの子達蹴散らすよりも簡単に倒せる。
わざわざランスをオルケスタに晒すなんて墓穴も良いところだ。
なので、ＨＰ１０万回復したらオルケスタってからノスが死ぬのを確認し、ランスと戦おうじゃないか。
そしてお仕置き。これだな！
と、ランス風にバカ理論を振りかざしてみたが、なかなか楽しいなバカ理論。
才能限界レベルを突破するためには仕方ない事だとは思うのだが、

ハイパー兵器がどうハイパーなのか楽しみな自分は、男精神だけどホモォじゃないはず。
むしろ自分がハイパー兵器生やしてやってみたい…はっ！
そうか！
その手があった！
今、この手足にあるような黒い魔力で作られた義肢のように……あれ？
よくよく感知してみると、具現化している魔力ではなかった。
なんか知らない物体になった何かが体から生えてる感じ。
手足の感覚がある。ただし動かすのに魔力が必要。
なんだこれ。
まあいい。だが魔力でハイパー兵器を作るのは良い。
そしてモロッコにランスぶちこんで、女ランスを頂くって寸法だ。
イイね！
「ククク…」
「おお、ジル様が笑われている！何か良い思いつきでもあったのだろうか。」

よく考えたら、女ランスにしたらＢＡＤ　ＥＮＤ扱いで、セーブ＝世界線が消される可能性がある。
とりあえず、才能限界あたりはなんとか考えよう。
別の世界で探しても良いのだし。
ジルとして演技って、負けも演技って別世界に逃げるのは悪くない。
なにせあの神だ。
異世界にまで追手がかかる可能性もある。
いや、エール活動中なら、いけるか？
ともかく、『楽しくなる異物』で、ある限りは自由行動が取れるはずだ。
魔王になると、こんな窮屈な思いをするんだなぁ。

方針を決めかねていると、ノスが倒れた感覚があった。
アイゼルはすでに魔血魂になってる。
出番か……あれ？オルケスタってないぞ私。
やばい！
異界移動!!!!
ふう、間に合った。
そしてオルケスタの息吹ＧＯ！
よし、ランスは来てないな……
接続完了!!!!
Ｌｖ５００到達！
勝った！第三部完!!!

「あーなんだったんだ？今のは。体がすごく軽いぞ。」
「おおおお！心の友よ！
お前さん、レベルがすごく…上がっているぞ！お前の才能限界っていくつなんだ？」
「知らん…いつも測定不能と言われている。」

……ウヴァ…

あれえ…
あれれー？
オワタ？

3．命乞いとか、魔王のくせに恥ずかしくないの？はい、命乞いしてるのは私です。

やあ諸君。こんにちは。
魔王を倒すのはやはり勇者だよね。
その勇者に対して、物凄く印象的な前口上述べるのが、一般的な魔王だよね。
例えば、世界の半分をやろう。とか、我腕の中で息絶えるが良い！とか。そんな感じの。
ナイチサとかは何を言われたんだろうね。気になる。
で、旧ジルさんはそんな危険はなく、部下に後ろから刺されてしまった訳だが。
現ジルさん。すなわち私はどうしているかというと。
はい、題名どおりです。
魔王の風上にも置けないほど、すごく……命乞いしてる感じ。

「くくく、射程範囲内だ、捉えたぞ魔王のねーちゃん。」
はい、後ろから斬りかかられるということも無く、真正面から言われましたが…ランスＬｖ５００くらいなんですよね。
で、私も同じく５００かと思ったんですよ。
はい…
４１６でした。
ナンデ？ナンデ４１６!?
才能限界レベルさん嘘つき？
いや原作も正しくＬｖは出していなかった。
故に…これが…私の最大値……
ＨＰは原作どおりだいたい５０万程ありますがね。
最大ＨＰは８億ですが。なんぞコレ。
ＭＰも混ざってるタイプのステータス。

ＨＰＭＰ分けて見たいんだけど、何処だ。
原作見るに、めっさダメージでかいからなぁ。
ランスアタックで１０万消し飛ばしてくしパない。
もしＨＰ８億あったら普通に勝てる。うん。よゆう。
マジありえない。
ではでは…
さあ、まずは会話（命乞い）から始めようか。

「よく来たな。ランス。」
「がははは、なんか知らんがとても調子がいい！
正々堂々一騎打ちだ！
いくぜ魔王ちゃん！
いままでの分、まとめてお仕置きじゃー！」
え、私なにかしてたっけ。
一人吸って。掃除させたからヤバい状態では無いはずなんだが…
「まあ待て。」
「んあ？」
「何を止まっている。耳を貸すな心の友よ！
今や魔王とお前の強さに差は無い！倒すなら今だ!!!」
カオスがうざい。
いや絶対に魔王斬るマンだから仕方ないんだが。
「実を言うとな、２０００年ぶりに自意識が戻ったのだ。」
「はぁ？なんだ？だからどうした？」
「２０００年…だと？」
私の言葉は聞いてくれるようだ。ほっ
「うむ。最初の１０００年の間、自分の主導権は魔王の血が持っていた。
あいつが人類に対する恨みとか憎悪とかを吸収し、体の主導権を握っていたのだ。」
「???」
ランス、理解してないのか。もっと簡単に言わないといけないか。

「封印中にはもう自意識を取り戻していた。
　つまりだ、私は心がキレイなジルちゃん？という感じなんだが…」
「よし斬ろう。心の友よ。
　キレイなジルちゃんとか鳥肌たつわ！」
「お、おう？」
　いやーわかるー。
　あのジルが自分のことちゃん付けとかないわー。
「つまり、あれだな。俺様とセ〇クスしたい。そういうことか？」
「おい！」
　いやー。マジ話早いわ―
「そう！それ！そのとおり！ピンポーン！」
　もうやけくそである。
「うほ…やはりか。モテる男は辛いな。」
「大馬鹿者！
　なんだかわからんが形勢逆転した魔王が、情けなくも命乞いしているのがわからんか!?」
「がはははは！
　よーし、それなら遠慮なく頂くぜ！」
　よし。これならば才能限界レベルも上がるはず。
　まずは５００目標で行ってみたい。
「ア、…アホか――――ーーー
　そいつ魔王なんだぞ！
　極めつけに最悪な!!
　今なら奴をぶった斬れる！
　お前さんならやれる！
　それをフイにするっていうのか!?」
　ガミガミ煩いカオス。
　原作通りな流れでカオス手放すとかしたら、すごく…助かるんだが。
「お前、うるさい」
「へ？」

ぽいっと捨てた。カオスを。
マジランス。ランスマジ。
「ぬ、ぬわーーーーーー」
パパスみたいな叫びでカオスは虚空に消えていった。
「ランスマジぱねえ。」
「がはははははは！
これで邪魔者は居なくなった！
さーて、女の歓びというやつを教えてやるぞ！ジル！」
「よし、バッチコイ。
ハイパーな兵器の受け入れは整っているぞ。」
ふう、凌いだ！
助かった!!!

ドス…
「へ…」
カオスが腹に刺さっておりますが何か…ぐはっ
「なーんて、元気いっぱいの魔王が何を企んで居るかしらんが
まずは倒させてもらうぜ！」
「え…いや、マジで弱ってるんだけど…ＨＰ０．１％未満…だよ…」
え、なんで？
カオス捨てたじゃん。
どうやって拾ったし？
「あー本気でビックリしたぞ、心の友よ。」
「俺様を油断させてから叩く。という目論見は良いが演技が杜撰だったぞ！ジル！」
いや、何いってんだこのバカ。
完全受け入れ態勢だったじゃん？
や、ヤバい。コレ、帰れなくなるパターンだ。
「いくぜ！ラーーーーーーンス
アターーーーーーク!!!」
開幕ランスアタックかよ！

腹の傷と合わせてＨＰ半分もってかれたんだけどーーーー！
「くっ」
とりあえず自衛。
絶望的な自衛!!!泣きたくなる!!
とりあえず全力全開で距離を開け…らんないし!!
くそ、なんだこの馬鹿力は。
「がははは！
防戦一方だぞ！ノスの方が張り合いがあったんじゃないか!?」
よーし、撤退戦だ。負けるのを見越してＨＰというかＭＰというか体力を残す。
ランダムでいいから異世界にいければそれでいい。
魔力の結晶のようなものを防戦の最中に作り出す。
で、呑む。
これで、やられた後に漂流してもなんとか…なる！
「ウルトラーーーーーランスアターーーーーーーーク!!!」
ぐはっ…もうＨＰ０…だめしぬ…
はい、ジルさんは一度も攻撃すること無く倒れましたよ。っとコレ…カオスにとどめ刺されたらＯＵＴなやつだ。
たのむーこっから先は原作通りに動いてくれー
「うーん。
まったく攻撃してこなかったな。
なんだか弱いものイジメをしている気分だったのだが。」
「それだけジルの奴が弱っていたという事だ。
さあ、心の友。トドメだ！トドメを刺せ！」
いやー人類の暗黒期作っててトラウマが激しいのは分かるけどな。
「はあはあ…それで、弱った私を、ちゃんと抱いてくれるんだろうな？」
「ハァ？何を言ってるんだ？
耳を傾けるなよ、いいからトドメを刺せ。」
「うーん。
そんな傷ついても俺に抱かれたかったとは。

すまんな、前言通り女の歓びを教えてやるぜ！」
「アホーーーーーー！
こんな奇跡的なチャンスもう無んだぞ！
そりゃあ、お前さんにしかできん奇跡だが、次はない！」
ぽい
「にゃ、にゃわあああああぁぁぁぁーーーーーー」
前にも増して馬鹿っぽく捨てられた。
今度は大丈夫だよな？
「よし、煩いのも居なくなったし、
ガツーンとお仕置き＆俺へのご褒美セ○クスだ！」
はいはい。
……
……
……
……
……
いやーＲ１８じゃないんだ。残念だな―。（棒）

はい、全国のジルファンの皆様
こんばんは。
だいたい原作通り、やることやって抱きついて、蹴られてふよふよと空間をさまよっています。
数千年出られないとかっていうのは、まあ嘘でありホントですな。
実際にこの中の時間の進みが違うので、向こうの一日が一体何年なのかねぇ。
と、言うことで。
Ｇ．Ｏ．Ｄさんが来るまで待機。
神とかに干渉されたくない。
腹の中のＭＰ塊では異世界転移一回が限度。
それで、適当な魔力ありそうなとこに転移できれば御の字。

２０００年代の地球とかだと、魔力無いしダメそうだし…
神代の地球だと命がヤバそう。
基本魔物系統の人種だから仕方ないね。
暫くすると、ピカ―と光っているのが分かりやすい。
神が来たな。
さーて。どうなる。

うん…さいあくだ
原作ジルもきっと、そう思っただろう。

なんでＬｖ１にしちゃうのかなぁあああああああ!!!Ｇ．Ｏ．Ｄさんよぉ!!!
ＭＰ玉呑んでなかったらヤバかった。
魔王ぱねえＬｖ１でも異界移動できる。
体力回復に魔力回復。異界で養生させてもらうぜ！
Ｌｖ１だけどな!!!

異界ゲート！
オープン！
これで！いきる!!!

……
…

あ、
はい。
ええ、おはようございます。
高層ビルの谷間に居ます。
１９７０年～２１００年代の地球ですね。
はい。
…あはははははははは
フラグ回収早すぎワラタ！

４．ルドワールドから逃げれても、ＡＬソフト世界からは逃げれない様だ

こんばんは、いつも全裸なジルちゃんですよ。
……笑えよ…
さて、Ｌｖ１でＨＰ１で弱りに弱った私です。
あ、ＨＰ０になっても死ぬんじゃなくて、戦闘不能になるんです。
だから０でも大丈夫。
死ななきゃ安い。そしてトドメは事実上刺せないので大丈夫。
あーいつになったら魔王パワーで無双できるんだろうなぁ。

さて、デ・ラ・アドミラル空間から抜けて、このビルの谷間に落ちたらですね、なんか変なのがいるんですよ。
「ヌンジャ！」
…表現がしづらいな。いや！私の語彙力では表現できないだけか。
（あきらめるなよ！）
雑魚っぽい、忍者コスで顔がサルっぽい白い仮面。
うん。私だとこんな表現だな。正直に外部の検索エンジン使ったほうが楽なんじゃ……
……あーなんかどっかで見たことあるかも？
超昂なんちゃら、えーと
エスカレイヤーだったっけ。
ほら怪人出てくるじゃない？
それそれ。
で、その怪人がね、延々と攻撃してくるわけよ。
無敵結界あってよかったわー。
ＨＰ０で戦闘不能。ＨＰ１でもあれば戦闘可能。
なんで、私底辺な話をしているんだろう。
流石にウザくなってきたし、雑魚モンスターみたいな怪人だからい

いよね。
やっちゃっても。
どうせ主人公……ヒロイン？まあそいつらが倒すし。

プシュ
なんだこいつ血マズい。
黒いしタールのような血だぞ。
恨みつらみ、憎悪を溶かし込んだような呪いのような血だ。旧ジルっぽい感じもするが不味い。
わからんが。こいつから栄養は摂れなさそうだ。
Ｌｖは２になったけどな。
しかし、なんか羽織るものないのかな。
仕方ない。こいつからはぎ取るか。
臭っ、まあ羽織るだけ羽織るだけ。

どこへともなく、ビルの谷間をてくてくと歩いていく。
マジつらい。
どっか神社とかでいいからさ、休むとこください。
復活したてでもＨＰ３０００あったんだが、今は３０…Ｌｖアップ回復分？
…え？最大ＨＰ？
あ、はい。８０００万です。
魔王パワーすげえ。すごいのは良いけどさ、回復どーすんだろう。
ぜんぜん足らない。
ＨＰ欠乏症と名付けよう。
比率は低迷したまま。Ｌｖアップボーナスで全快回復とかマジで無い。
力が足らないのは、なんとかＬｖ上げて対応するか。
はよう２０万ほど回復させてオルケスタらなきゃ。
て、さっきから周囲が騒がしいな。

「キャーーーー」
「なんだアレ…」
「なんて瘴気だ。これが新しいノロイ党の怪忍か」
ああ、あと魔力あったわ。
アリスソフトワールドだからだろうか、なんかイイですね。
魔力あるとそれで自然回復できるよ。（※しない）
おかしいな、股からランスの皇帝液が垂れてるし、レイポー後だと思って誰か保護してくれんかなぁ。
あ、ダメですか。
しかしランス天才だよな。
ハイパー兵器とか皇帝液とか、わいせつな単語を使わずにわいせつな物体について語れるとは。
そこは正直感心する。

――悪鬼さ迷う現の闇を…
払うは月影、我、上弦衆なり！
「想破上弦衆、閃忍ハルカ！」
「同じくナリカ、見参っ!!」
あーあー
来ちゃったヒロインズ。
あれーあれー？私、怪人扱い？
「くっ、その破廉恥な…なのに、なんてプレッシャーなの。」
「この怪忍。手ごわいわ。気を付けて行きましょう」
「はい!!」
なんだろう、この……テンションついていけなささ加減。
あと真っ裸にヌンジャの着てるもの羽織ってるだけですからね。
皇帝液オプション付きだが。
「ただ其処にいるだけで恐怖を与える非常識な存在…
断じて許せるはずもなし。」
すごい、私居るだけで罪とか。さすが魔王です。Ｌｖ２だけどね。

あ、魔王Ｌｖも2だわ。
「我が背に負いし月影に代わり、忍びの技にて砕きます。」
前口上が終わったようなので、拍手をしてみる。
ブラボー！
「な！一体何に拍手しているんです?!」
「すごい。時代劇がかった口上がすごくて拍手しちゃった。」
素直にほめそやす。
いやーそれほどーな顔のナリカ?だったかな。
と、全然顔色変えてないハルカ。認識が違うようだ。
「ところで、カメラどこにあるの?何の撮影?」
「なっ！」
「ちょっとーノロイのくせに何いってんの?ふざけないで！」
いや、ノロイとやらではないんだけどね。
「なんて瘴気。あるいは炎斎を超えるほどの。
いったい何故この結界内で活動できるのか。」
うーん。確か超昂系で合ってるんだろうけど、実はそんなに覚えてない。てかプレイしてないな。
「お覚悟！」
なんか苦無が飛んでくる。あーれー
「雷針撃!!」
なんでいちいち技名言うんだろう。
あ、攻撃はガンガン無敵結界に阻まれていますよ。
「はあ!!!!」
「隙あり!!」
いや、隙だらけだよ?何言ってんの?
てかぼーと突っ立ってるだけだし。
「なんて硬さなの」
「落ち着いて、どこかに弱点があるはず。」
あるよー
カオスと日光とエスクードソードってやつ。

「雷光衝!!」
魔法攻撃に切り替えたのか雷が降ってくる。
もちろん効かない。
なんかあきらめないかなー。
だいたい、奴らの正義の味方ごっこにはつきあってらんない。
こちらからも反撃してみるか。
いやいや……ちょうど良いところに餌があると思おう。
死なないように手加減して吸えばいいよね。
「くっ、閃、四門五月雨!」
はい残念。
なんか激しい攻撃を真正面から受けつつ手を伸ばし、ハルカを捕まえる。
「ハルカ!!」
いっただきまーす。
カプ
…うまーーーー!
やばいヒロイン美味い。ついでに回復もかなりのものだ。
マジ独占したいくらいだが、コレはあれだ。
死なないようにしなきゃ。我慢我慢。
「な…」
ふう、よし、ナリカだったかな、そっちも吸おう。
ハルカは吸ったせいかそこらで倒れてる。
「きゃあ!こっちこないで!!!」
だいたい私は何もして無いし、むしろ君たちの敵を倒したと言うのにひどい扱いじゃあないか。
「いただきまーす」
「いただかれないわよーー!」
素早く逃げ回るナリカ。
流石忍者というところだ。
はて……忍者系の超昂系あったっけ?
「くっ!撤退よ!」

撤退をわざわざ口にするとはなかなか正直だな。
追っていると煙玉で煙幕を張ったようだ。
ふむ、残念。
こちとら魔力とかで存在感を頼りに追撃ができるんだなぁ。
ああ、こういう所は魔王無双だな。もっとパワフルに無双したい。
回復させなきゃ。
てか、なんで休む暇くれないのかね。
カプ。
「キャーーーー」
はい、ナリカさん。煙玉に油断していたらダメですよ。
ちゅうちゅう。
美味い！
もう一杯！
いや吸いすぎはダメだな。
我慢我慢。
開放すると、ドサッとナリカが倒れる。
「ごちそうさまでした。」
ナリカに手を合わせて居ると、後ろから魔力のような瘴気のようなものを感じる。
誰か来たか。
「素晴らしい！
ノロイの力を受けていないにも拘わらず、この力、この憎悪！」
なんか、腹に槍だかなんだかが貫通しているお爺さんが居た。
「どうだ、ノロイの力を得、同志にならぬか？ん？」
悪のお誘いである。旧ジルであれ、新ジルたる私であれお断りである。
基本姿勢が天上天下唯我独尊だし。
「……お前誰だ。」
「儂の名は骸居炎斎。ノロイによる、救世（くぜ）。恐怖によって世に安寧をもたらす事を目標としておる。」
何言ってんのこいつ。あたまおかしい。

「人々の負の感情を糧にするノロイ。儂はこの力を以て人の世を壊し、恐怖による安寧によって人を救わんとする。」
えー……
それさー旧ジルの善肯定。（誤字にあらず）
人虐めを生業にしていた、凶悪で邪悪な魔王ジルさんと、世界を救うという善意？みたいな思想がなんで同じ方向を向いているの？
ばかなの？しぬの？
「……その世界なら、別世界だが、すでに１０００年程運営したことがある。」
旧ジルさんがね！
「なんと！既に救世を成し遂げられていたか。」
あーだめだ。こいつに何を言っても平行線だ。
旧ジルロールプレイなら話ついてけるんだろうけど、自分無理。
「飽きた」
そう一言呟いてこの場を立ち去ってみよう。
クールにな！
「飽きるほどの救世とは羨ましい限り。
やはり、貴方は是非とも同志になっていただきたい。」
おい、敬語になってんぞ、悪の親玉！
……
あ、私もいちおう悪の親玉だ！
てか、ついてくんなし。
「うっとおしい。
私に関わるな。」
「うーん惜しい、惜しいですぞ。」
だんだんノスぽく感じるようになってきた。
ノスの時は無敵結界の中和作用があったから、命の危険もあり大人しくしてたが、ここで付き合う必要もない。
だいたい、おまえの血不味そうだし悪役だから死にそうだし。
私は中立で居たいんだ！
体力回復させろ!!!

あーふらふらする。
あ、何かに当たった。
「ぐは……馬鹿な。こ、こんなところで……天壌無窮……」
なんか近寄ってきたラスボスが吹き飛んでいる件。
腹に刺さってる剣だか槍が抜け飛んでて、傷跡から血がどばどば出ている。
正直不味そう。

…

…

…あ、死んだ。

「え、…え？どうすんのこれ」
私の想定している無双とは違う方向で進んでいるわけだが。
これどーすんだ。

魔法少女まどか☆マギカ編

5．こんな敵だらけの世界に居られるか！私は帰らせてもらう！

こんにちは。
なんだか知らないけど多分シナリオぶっこわしたジルさんです。
今ですか？
ジジイぶっ倒れたのをほっといて、その辺の洋服店に入って着替えています。
２０００年ぶりの下着。２０００年ぶりのお洋服です。
まあ、憑依した時から真っ裸だったけどな。
ヒロインズから吸った血とジジイ…ラスボス倒したおかげでＬｖも上がり、ＨＰ１５万ほど確保できたので、とりあえずオルケスタろうかと思います。
私の！
無双は！
これからだ!!!

と、打ち切り最終回ぽく意気込んだが、全然最終回じゃないよ。
大丈夫。
しかしジルの容姿はすごいよね。何着ても似合う。セルフ着せ替え人形を愉しんでおります。ムフフ。
とりあえず手足に黒い靴下と手袋して、黒系の服…なんでゴスロリが似合うんだ。
いやいや。もっと目立たない服にしよう。
大人しめの普通の洋服を着てと…。あぁいいね。可愛い。コレもナルシストになるのかな。
目のほうがちゃんと焦点合っててクマがないから、なおイイネ。
あと、魔力とか瘴気とかプレッシャーとか垂れ流し良くない。
正義の味方ホイホイになってしまい、今回みたいな事態を引き起こ

してしまう。
こう、出ないように引き締めよう。
………………………
……………………
…………………
………………
……………
…………
………
‥

準備完了！
漏れる魔力と瘴気は抑えた。
さらば超昂世界よ！
こんな敵ばっかりの世界に居られるか!!
私は帰らせてもらう！
異界ワープ！
デ・ラ・アドミラル空間でオルケスタって…
…接続終了。
Ｌｖ４１７のＨＰ４５万むふふ。
才能限界Ｌｖ上がってるあがってる！
さーて、ルドワールドに戻ってもいいが、シナリオ崩壊待ったなし
になるからな。
別世界で養生しよう。最大ＨＰまでとは言わんが7億くらいまで
は回復したい。
どっかＨＰとかが回復する癒しの世界は無いものか。
まあ、こんな所に居ても消耗するだけだし、移動してしまおう。
いざ！ゲートオープン!!

ランダムに繋いだ黒い門から出ると、またコンクリートジャングルが見えた。
はぁ…。まーた、現代世界ですか？
現代異能バトルでもさせたいんですかね。
てか、前の世界よりもっと濃密に魔力とか瘴気とか感じるんですけど。
どーなってんの？地球さんよぉ！
よし。今回は真っ裸じゃないし魔力も瘴気も出してない。
どっか休みたい。休むにはどうしたらいい？
……あ、金無い。
……
無銭飲食して留置場で休むというのもひとつか。
いや戸籍がないから不法入国のセットで大変にめんどくなりそうだな。
政府筋で異能者居たらやっかいだし、どっかで金かせぎたい…
そんな風にキョロキョロしていると斜めの方から、チャラそうな男が近づいてくる。
「はーすっげえかわいいな。あんた
なあなあ、これから遊ばない？」
ああ、哀れな犠牲者が声をかけてきたぞ（ナンパという）
こいつから金をいただくのもアリだな。
付いていこうと返事をしようとしたとき、背後で魔力が弾けた。
なんぞ？
世界は一気に塗り替わり、急造された異世界に放り込まれる。
「な、なんだあ!?」
ナンパした男が慌てる。
この世界の説明もしづらい。
子供の落書きのような？そうでないような独特のタッチで描かれる世界だ。
またか。また私に安寧は無いのか。

だが、大丈夫。
今回はＨＰも４５万あるし、いちおう戦闘可能なだけの体力はある。
ふらふらだけどな！
周囲からなんかわからん化け物？うん化け物。世界と同じタッチで描かれる敵。
それが蠢き、襲いかかってくる。
植物のツタのような、クレヨンの絵の具のようなソレが巻き付いてくる。
「う、うわあああああーーーーー」
男は逃げ出した。
しかし、回り込まれてしまった。と、表現すべき感じで行く手を敵が阻む。
声が聞こえる。少女独特の甲高い声。そして笑い声だ。
敵の声なのだろう。
不気味さが一層際立つ、そして思う。
コレ、アリスソフトなワールドじゃねえわ。
いや、またそうかなーー今度は何かな？って思ったけどさ。
気が付けば男は食い殺され、上半身が無くなっていた。
「あ、…」
そうだ、金だ。
ジルちゃんはズボンのポケットにある財布をゲットしたのでした。
え？敵？
ああ、うん。
ガンガン攻撃してきているよ。食おうとしている。
植物のツタがまるで触手のように蠢いて絡みつき、獲物の動きを止める。そして食らいつく。
当然まったく効きません。
唾液で服が汚れるので勘弁して欲しい。
何かしらのヒーローか何か来ないかな。
てか、この敵の異世界にもなにか見覚えがある。

うーん。
なんだったっけなぁ。
確か…カレー。わんわん……ああ、イヌカレー空間だ。
と、すると…
銃声。ドスンドスンとライフリング付きマスケット銃から弾丸が放たれる。
はい、知ってた。
魔法少女ですね。わかります。
そっかー、今度は魔法少女まどか☆マギカ世界ですか。
まあ、エロゲワールドから出れて良かった。
「危機一髪だったわね。」
いえ、間に合ってなかったよ？
ガンガン攻撃食らってたし。
確か、首もげの人だ！
「ちょっと待っててね。すぐ片付けちゃうから。」
あ、お構いなく。
で、ものの数十秒で、敵は全部この人が片してくれました。
「大丈夫？怪我はない？」
「ええ、大丈夫ですよ。ありがとうございます。」
ええ、キレイなジルちゃんですからね。
ちゃんとコミュニケーションはとれます。
てか２０００年でやっとまともなコミュニケーションが…ああ、感涙だ。
「ああ、泣いてしまって。
もう大丈夫よ。怖かったわね。」
あ。勘違いさせてしまった。
ボッチ同士仲良くやっていこう。
「今回は使い魔だけだったようだね。」
白いマスコット風宇宙人。インキュベーターさんである。
まあ、ある意味宇宙の維持を考える文明人の鑑ではあるんですよね。

人間を家畜と考えているあたり、旧ジルに通じるところがあるが。
てか、そんなんばっかりじゃないか？
これが旧ジルの呪いか…
「ええ、魔女じゃなくて良かったわ。」
「魔女？…あと、なにそれ」
とぼけて応対してはいけない。普通に普通の感想と質問だ。
普通普通。コモンセンス。
「キュウべぇが見れるなんて、貴女も素質があるのね、良いわ私につきあってくれない？」
「…？」
「やあ、僕の名前はキュウべぇ。宜しくね！」
いいぞいいぞ。こいつんちに泊まったりして回復だ。
どうせ頭もげして、いずれ消えるし、こいつんちで休むのはアリだな。
この白い宇宙人に関しては、どうでもいい。食っても回復するとは思えないしな。
「今の魔物と、魔法少女について説明したいの。うちに来てくれるかしら？」
「うん。」
コクリと頷き、スーパーで食い物を買ってから、彼女…巴マミの家に向かった。
魔法少女になることは無いだろうが、なった場合は魔王少女になってしまうのだろうか。
だいたい年齢は２０００歳超えるぞ？
希望と絶望の相転移だろう？
絶望の底の底を、庭園を気軽に散歩するように行ける私に対してどうしろって言うんだろうね。
まあ、あの宇宙人。押さえつけている私の魔力を素質として反応したのかもしれないが。

巴マミ宅で、ご飯食べつつ魔法少女とか願いとか諸々聞いた後、
魔法少女にならないかとの問いは「特に願いは無い」と、答えたが「せっかくだから」と、魔法少女体験とか言って来るんです。
まあ、魔女から命吸って回復できるかもしれないから了承したが、あと何年で本編始まるんだ？
端折りすぎ？いや眠い。勘弁してくれ。
そのままお泊りしました。
今は昼間で、マミ宅でお休み中。彼女は学生なので学校に行っています。
あーやはり食事と睡眠でいくらか回復しますね。
一日やそこらで全回復しない。だが、ただ寝ているだけというのも難しいし、回復には食事も必要だ。
それなりに活動しなければならないのは、本当に怠い。
やはりノスでいいから顎で使える奴が居たほうが良い。
だるいなー。

で、放課後。ずっと寝ていましたので夕方です。
そしてねんがんの魔法少女体験である。
待ち合わせの場所に行くとですね、うん。
なんというか、知ってた。
一緒に同行する奴、まどかと、さやかですね。はい、マジ本編中ですよ！
あれー？なんかタイムスケジュール合わないんだけど、いいのか？
まあいい。挨拶は基本だ。挨拶しよう。
「こんにちは、私はジル。何か魔法少女体験に誘われました。」
「おお！こんにちは？　私は美樹さやか。こっちはまどかよ。」
「よろしくお願いします。鹿目まどかです。」
…ふむ。こいつがアルティメットまどか…神になれるんだよね？
まあ概念だけかもしれんが。
となれば神パワーの得かたについても考察できるかも知れないのは僥倖だ。

存分に観察させてもらおう。
「自己紹介も終わった所で早速行ってみましょうか。」
そう言ってソウルジェムを手に取り、魔力探査を行う。
ふむ…ふむ…
あっちか…
ン…？ああ、マミはまだ見つけていないのか。
がんばれー
しかし魔王というのはすごい。
魔物の王でもあるし、魔法の王でもある。文字通り魔の王だ。
魔法を使うのではない。魔法が使われるのだ。
訳が分からない？
本来であれば、定型の魔法を使うのが一般。決められた魔法しか使えない。
では使われる魔法とは何かというと、魔王自身が欲しいと思った効果を魔法の方が忖度して使用されるのだ。
魔法による忖度。それが魔王だ！
いやー
マジ魔王ぱねえ。
Ｌｖ見るのだって、ＨＰ見るのだってオリジナル魔法だし、さっきの魔女探すのも魔女レーダー（新規で作成）探せる。
流石に惑星一個まるっとスキャンするのは骨が折れるが、やれなくもない。
無敵結界欲しかっただけなのにね、なんでだろうね。
さて、そんな考察をしつつ、みんなでぶらついていると、やっとこさ魔女を見つけたようだ。
「こっちね。」
「あ！マミさん!!」
行く先のビル屋上から、飛び降りる人影アリ。
落ちた人は巴マミが危なげなく魔法？で救助する。
助けた後に何か言っていたが、魔女の口づけとかなんかそこらへんの説明だろう。

そのまま進むと目的地のようだ。
「さて、ここから魔女結界の中よ。十分に気を付けてね。」
素人を、危険なとこに入れるなよと言いたい。言わないけど。
お供の二人は頷き、恐る恐る入っていく。
自分は最後になる。

「…」
チラ見。はい、暁美　ほむら発見。
知ってた。
ワルプルギスの夜だったっけ。
アレと戦うのか…いやまて、別に戦わなくても良いか。
シナリオ通りならアルティメットまどかが倒すし。
まーせいぜい楽しませてもらおう。
フハハハハハ。
と、心のなかで笑ってから、魔女結界にＩＮ。

うーん。入ったらなんかね。
魔女結界のど真ん中でね。自分魔女に巻き付かれているの。
なんで？

6．【急募】今学校の屋上なんだけどさ。施錠された学校から飛び降りないで出る方法教えろください。

こんばんは、諸君。
まあ、聞いてくれ。
いきなりですまないが、触手プレイと聞いて何を想像するかね。
うん。艶めかしい肉の触手が、白い肢体に這い回る。
そういったエロティックな事を思い浮かべるだろう。
そう。それだ。
それを植物の蔦でやっているのが今の自分です。
いや、服が破けるので勘弁して欲しい。
全力で抵抗すると本当に破けるし、エロい展開になってしまうので発禁になてしまう。
ま、マミさーーーーん！
は、早く。早くしないととんでもない事になってしまうぞ!!

はぁはぁ…そんな考察を１０回くらいループさせたんだけど。
全然来ないから、別に倒してしまってもかまわんよね？
というか、力入れると服が破ける。
うーん。
……とりあえず、吸うか。
カプ。
うげ、苦い。
何だろう。前のノロイとやらもそうだったが、人の苦悩だとか恨みとか憎しみがメインだと、ビターに感じる。
もう少しミルクを混ぜてまろやかにしたい。
できれば砂糖も混ぜて欲しいが、でも今回は、なんか回復量は多い。
つまり、魔女から吸うだけでも回復できるって事だ。
１５０万程に回復したので、すごい回復量だ。
あ、魔女の木枯れた。

吸いすぎたか。
枯れ果てた魔女の木から抜け出ていると、上の方から足音が近づいてくる。
「これは一体!?」
「あ、ジルちゃんだ！大丈夫!?」
やっとマミ達が来たようだ。
遅い…っ！
だがまあいい、だいぶ弱らせたし楽勝だろう。
「あれ…が、魔女？なんか枯れているみたいだけど。枯れ木なのかな？」
様子を見ていると、なんか戸惑っている。
ん？あれ？なんで銃口、私に向けるのかしら？
「これはどういう事かしら？」
どういうこと？
と、そうこうして居ると魔女結界が崩れて、場面は廃ビルに移る。
でも相変わらず銃口を向けられてて。
え？なにゆえ？
「どうして貴女が魔女を倒せたのかしら？」
…
…あ！
衰弱させてたつもりだったけど、倒しちゃったのか。あはははは。
「え……えーと。なんと言いますかね。ハハハ」
「もしかして、同業者…魔法少女なの？」
魔王少女でーすと、答えたらどうなるかな。
笑いは……とれないか。
「違うよマミ。彼女は魔法少女じゃない。」
「…そうなの？キュウべぇ」
白い陰獣め、余計なことを。
「それじゃあ、本当に一体……何者なのかしら。」
一体何者か分からない者を泊めてたんですね。いや危機感無いですよね。

大丈夫だよー、安心安全なジルちゃんだよー
「昨日から観察していたけど、隠している魔力の高まりが昨日から比べて段違いだ。これは素質ではなく、意図的に魔力を隠しているね。
彼女、人間じゃないよ。」
あーーーもーーなんて事言うんだ。この白いの！
「なんですって？」
「私達を…騙してたの!?」
「そ、そんな!?」
さやかは疑わしいものを見る目。
まどかはオロオロしている。
「僕も興味があるね。いったい君は何者なのか。」
ううう、コレ研究対象になった場合、この宇宙人に勝てるか？
敵ならば排除しにかかるだろう。
利があれば、魔法少女救済システムすら制御しようと試みてくる。
これだから宇宙文明の奴は嫌いだ。
「……」
どう……する？
どう答えようか。
どうするにせよ、誤魔化す方向で行こう。
「ふう、仕方ない。
私は魔法使い。魔法少女なるものは興味があったが、騙すつもりなんて無かったよ。」
よし、落ち着いて言えたぞ。
「そう…なの？」
お、マミは信じかけているな。もうひと押しか。
「魔法使いというのも興味あるけど、それは人間ではない事に対しての説明にはなっていないじゃないかな。」
納得仕掛けたマミの横で白いのが余計なツッコミを入れてくる。
あの宇宙人めが！
しかし難しい問題だな。
人間ではない。それは正しい。では何者かと問われれば種族なに

になるのかね。
魔王というのは正しいが答えたくない。魔人とも違う。
今度聞かれたら、ちゃんと言い訳できるように答えを用意しておこう。
とはいえ、今は目の前の言い訳だ。
「えーと…」
「…」
無言で銃口向けてくるの怖い。いや命の危険が無いから怖くないはずだが、銃口＝怖いってなんかあるよね。
先端恐怖症に近いやつ？
「あーいやーその。
うん。
吸血鬼やってます。」
とりあえず、血とか吸う吸血鬼系魔王なので、朗らかにそう答える。
パーン
ちょ、吸血鬼ＯＵＴですか!?
マスケット銃撃たれた。
眉間ですよコレ。
「ちょ、いきなりすぎ！」
「効いてない!?」
「うぇいとうぇいと、落ち着こう」
ドパパパパパパ
「だーーーーー」
マスケット多重展開の射撃で、服が！穴空いちゃった!!
「くっこれで!!」
無傷なのを感じ取ったのか、
しゅるりとリボンに包まれる。
で、拘束。
あ、無敵結界あっても拘束はされるのか。
勉強になるな。
「ティロ・フィナーレ！」

あ、なんかでっかい大砲が…
重低音を響かせて私を弾き飛ばす。ぬおおおおおーー
廃ビルの天井を突き抜けて大砲の弾丸と共に空へを舞い上がる。
あーなんで、ヒロインズと敵対する羽目になるかなぁ。
でもまあ、生ティロ頂きました。ごっつぁんです。
でだ。砲撃で放物線を描いて到達したのは…彼女らの学校でした。
屋上に着弾しそうだったので、エアブレーキ。
あ、別に航空機のエアブレーキじゃないですよ。
マジで空気固めてブレーキにしてます。
最後の方は浮遊する感じにして屋上に降り立つ。
まあ、あの場から逃げれたし、良しとしよう。
しっかし……マジで全面ガラス張りの狂気の学校だ。
ぱねえ。
私は、狂気の学園にひとしきり感動したあと、抱えていた砲弾の魔力を解いて消し去る。
いちおうグリーフシードは落としてったから、何かしら誤解してくれていると助かるんだが。
「やっぱり君には効かなかったか。」
なんか白い宇宙人の声がしたので振り向く。
あ！
体の向きを戻して、シャフ度でキュウべぇを見やる。
「…今のに一体何の意味が？」
キュウべぇの呆れ声に私は答える。
「特に、意味はない。」
決まったな！
いや決まってない。何考えているんだ私は。
「君が吸血鬼と言い張るならそれでも良い。
でもそれは君の防御力と隠し持っている魔力の説明にはなっていないよね。
君が一体何者なのか興味が尽きないよ。」
研究熱心だな。

まあ、こいつらと、白クジラを戦わせてみたくはあるが、きっとくじらの勝ちだろう。
神としての権能の有無。
それがあればエントロピーとか言うはずがない。
「ふむ、だんまりかい。それもいい。
僕らは君を観察させてもらう事にするよ。」
げ、ストーカー宣言ですか。
面倒な。
でも、本当に何処まで把握しているか分からないんだよね。
魔女結界の中ですら把握しているようだし惑星全土を網羅しているとしても驚きではない。
厄介な宇宙人だな。
さて手の内を見せるわけにもいかないし、どっか休むところを確保したいのだが。
マミ宅は彼女がマミるまで厄介にはなれないしな。
いや、本編通りならマミるのも時間の問題だな。
暫くは野外に泊まろう。
ホテルも宿帳とか記入が必要だしな。
…
がちゃがちゃ…
鍵が閉まってる…
…
…
…
【急募】今学校の屋上なんだけどさ。施錠された学校から飛び降りないで出る方法教えろください。
さて、せっかく手に入れたマミの携帯で、そんなツブヤイター―をしてみる。
遊びはともかくとして、どうしよう。
うん。コレ飛び降りるしか無いよね。
屋上から下を見る。誰もいないかな。

よし…
「それで、本当に貴女は何者なのかしら。」
真後ろから声がかかる。マジ心臓に悪い。死なないけど。
……暁美ほむら。いつの間に……いや時間停止か。
厄介だなぁ。
「どうやって入ってきたの？」
尋ねると、顎をしゃくって、屋上の扉が開いている様子を教えてくれる。
あ、はい。時間停止ですね。
なんでもありだな。
「うーん。何と聞かれてもね。」
「私の経験上、出会ったことのないタイプの人だわ。」
経験上ね。
一体何周目なんですかね。って聞ければ楽しいのだが。

「まずひとつ。
敵ではない。あらゆる意味でね。」
まず敵対する意味はない。そして敵にするほどの相手でも無い。
まどかに対するラブなライバル（敵）でも無い。
「次に私の目的は休養だ。
酷く衰弱しているのでね。体力を回復させなければならない。」
「それにしては、随分と派手にやりあっていたようだけど？」
「ハッ。やりあう？一方的に撃たれるのがやりあっていると言えるの？」
「……っ。そうね。でも反撃できなかったんでしょう？」
ふむ、実力をお疑いか。
時間停止魔法。一応見たからな。
なら真似ることなど造作もない。それが魔王だ！どーん！ぱちぱち。
ということで時間停止してみ…なんだ！このＭＰ消費ぱねえ。
後ろに移動後ろに移動。

停止解除！　うは、ＨＰ（ＭＰ兼用）が１００万きってる。やばいだろう時間停止。
数秒だぞ…
「別に、出来ないわけじゃない。」
ばっと、驚いた様子で振り向くほむら。
くふふ。ドヤ顔でお出迎えである。
いやマジ次は使わん。
「なるほど……そういうことね」
そう。強いのさ～
「貴女もまた、ループの依存者というわけね。」
ん？
待て、一体何の話？
「……休養と言うけど、本当の理由は……教えるわけないわね。」
いや本当に休養ですよ。はい。
「私から、私の目的を明かすから、貴女も答えてくれないかしら。」
「いや、本当に休養だよ。ほんとほんと。」
「っ……あくまで言うつもりは無いという事なのね。」
なんでそうなる！話聞いてお願い。
そういうとほむらは、踵を返して屋上から出ていった。
あれーー
ガチャン。
ああ、鍵も閉めたな。
【急募】誰も私の言うことを信じてくれない件。信じてもらうにはどうしたら良いですか？【誰か信じて！】
マミのアカウントで、つぶやいてみた。

7．『我が名を聞き、生きていることに感謝せよ。我は五代目魔王ジル。お前に絶望をくれてやろう。』なんて名乗りはどうだろうか。…うん。却下で

おはようございます。残念な方のジルです。
皆さんは残酷な方をお望みでしたでしょうか。
先日屋上に取り残されたあと？……
学校から飛び降りて、お布団とテントを買い、そのへんの廃ビルで寝て今起きた所。
全体的にだるい。もっと寝てたいけど、お腹すいた。
正直、旧ジルの中に居すぎて、酷い事のレベルが違う感じだ。
寝起きで思ったのは、なんで彼女ら救わないの？という疑問だ。
普通に意識ある時だと、なぜか思い至らないようだ。
いや、原作介入とか前回やっちゃったから、やるのは構わないんだけどね。
なので彼女らの不幸を助けたいと、思わなくも無い……が、
不幸？っていうほど不幸かな？
そんなふうに思ってしまうのは、長年人間牧場とか様々な人間虐めを見てきたからかも知れない。
アレを見るたび、どうにかしなきゃ、とか、助けてあげたいな、とか思うんだけどね。
このかすかに残った良心的なものが自分という奴だろうか。
まあ、だいぶ心が壊れているなぁと思わなくもないのだけど、今の彼女らは幸せに見える。なので助けるほどでもない気がする。
今後の不幸についても、もう少し追い込んでも良いんじゃないかなって思う。
人間、1度や2度くらい絶望しても良いと思う。それから起き上がってきたものは強い。
…ん？
あーー。なるほど、一度の絶望もできないのか魔法少女は。

ならば、その弱さも必然か。酷いなキュゥべえ。
さて、これらを踏まえて私がどうしたいか考えよう。
……
眠い。だるい。休んでいたい。
いいじゃないかな、原作介入しないでだらだらしていよう。
一番したい事が休憩なのはＨＰが１％未満だからだな。それは仕方ない。
でだ、
マミる奴は助けたいかどうか。うん、どうでもいい。まど神出来たらどうせ復活するし。
さやかは、もうちょっとあってもいいな。
彼氏を寝取るだけじゃなく、目の前で今度は腕を切り取るのも良い。
……って、なんでナチュラルにいじめる方向になってるのかな。
そういう意味ならあれだ。マミのソウルジェムだけ確保して肉体はマミらせよう。
そうして魔法少女の真実とやらに迫れせてもいいな。
どれだけ魔女にならずに耐えるのか見もの…って、いかんいかん。なんでいじめる方向なんだろう。
うん。あれか、性癖じゃないけど旧ジルに調教されてしまったのだな。難儀だ。
それでもまあいいや。
よし、いじめる方向でいってみよう。
そうすると次は赤いのか。名前忘れた。
あれは、どうするか。適当にボコるかな。そんでその辺の男どもに……おっと１８禁はやめとこう。
んー。面倒だからちょっとキツめの拷問をした後、両手両足もげさせよう。
んで、その辺の河川敷に捨てる。あの詰んだ感じは中々クルものがあったからな。

もしそれで魔女化したら吸っておしまい。
いいね！それでいこう。
まどかは…まあ、いいや。ほっとこう。
ＱＢがどうせ追い込むんだし。ストーカーついてるし。
ストーカーといえば、暁美ほむらはどうしよう。ん～～最終的に悪魔になるしほっといてもいいか。
と、考察したが思いの外、あんまり虐める対象が少ない。
ああ、もともと救われないからな！
よし、本人から直に助けを求められたら助けてやろう。気分で。
あとはマミも石ころだけにしてから、何かに憑依させて虐めたいね。
体は外付けハードだから、適当な肉体を選定したい。
さて方針も決まったし、今日は魔女狩って回復させつついじめ対象を見に行こうか。

……
朝の食事代わりに、魔女レーダー魔法発動。
発見したので襲撃。魔女結界に入ってちゅうちゅう吸う。
あー、回復するなぁ。苦い！もう一杯！
グリーフシードは食べてみようとしたが固くてだめだった。吸えないしつまらない。
とりあえず貯めておこう。
こう普通に活動していても、どこに白いのの目があるかが怖い。
宇宙文明人だからな。どこで何を見ているかわからない。
観測できれば、最終的に魔王も克服されてしまうかもしれない。
観測されてはならない……
そうだ、対白いヤツ用ステルス魔法開発しよう。
ステルス魔法開発でどうしようかとうんうん唸っていると、後ろから近づく気配。
そのまま唸っていると声をかけられた。
「私のシマで魔女狩りとは、随分なヤツじゃねーか。

しかも挨拶も無しとはね。」
「…」
よしっ！…シャフ度でお出迎えできたぞ！パーフェクトだ。
決まったな。クフフ
「だんまりか？ここらは私のシマなんだ、好き勝手やりやがって、
お前どこのもんだ？」
お前さんはどこのヤクザ人だよと言いたい。
物言いがまるっきりソレである。
ふーむ。先に来ちゃったな赤いの。さて、どうやって遊ぼうか。
「別に、私は魔法少女ではないのだけどね。
魔女は趣味で倒しているのだけれど。」
「ハァ？
え…パンピー？いや魔女倒せる一般人なんて聞いたこと無いぞ。」
さて、どうやって敵対するかな。
どうにか吸血鬼バレさせて攻撃させようか。
その方向でいこう。
「まあ、一般人…ではないからね。」
「それで一般人だったら驚きだ。
だけど、益々気になるな。あんた何者だい？」
お、来た。存外早くイジメれそう。
「吸血鬼。と、一般的には言われているわね。」
どやー
これでマミは攻撃してきた。反撃して、お仕置き。コレね！
「はっはっは！
昼間に歩き回る吸血鬼か、いいねぇ面白い。」
ん？
「で、吸血鬼さんは、なんで魔女倒してるんだ？」
「……気晴らし？」
なんか話の方向が違う。
ん？あれ？どうやって敵対しよう？
「……気晴らしで倒せるもんじゃないと思うけどな。じゃあグリーフ

シードはどうしてるんだ？」
「グリーフシード……ああ、これ？」
私はさきほど狩ったグリーフシード（唾液付き）を出す。
「血は無かったから吸えなかった。」
「……試したのかよ。」
そういえば、使用済みグリーフシードは吸ってないな。ちょいと交換してみるか。
「貴女はコレ。何に使うの？」
「ああ、なんだ。知らないのか。
これに、ソウルジェムの穢れを吸わせて、魔力を回復させるんだ。」
穢れだが私には魔力になる。勿論魔法少女からも吸えるだろう。
こちらはきっと甘露な味がするし、勿論魔力も回復するだろう。
どちらにせよ回復する私と違って、魔法少女は大変そうだ。
「物は試しね、使用済みのグリーフシード…ある？」
「ん？あー途中のならあるぞ。」
「交換しない？未使用のコレと使用済みのソレ」
「……良いけど。」
私が未使用のグリーフシードを投げて寄越すと、不承不承赤いのは使用済みのグリーフシードを投げてよこした。
「んで？何を試したいんだ？」
私は何も言わず、ソレに口づける。というか吸う。
うへ…ヘドロ混じりで気持ち悪い苦さ。
不味い。
でも回復する。
さっきの魔女よりは回復しないものの魔女に比べて5割は回復した。
よしＨＰＭＰ兼用で３００万まで来たぞ。
「なっ…吸血鬼ってのは、そんなもんからも吸えるのか。」
「あら、貴女の血を吸ってもいいのよ。」
安い挑発をするが、それがかえって気安さになったようで、赤いのから険が取れる。

「はっ、何かの報酬なら吸わせてやっても良いけど、なんだ、グリーフシードの浄化ができるのか？」
「なんか吸えた…魔力が回復する。たすかる。」
「ほーー」
ひとしきり感心した後、何か納得したようだ。
「じゃあ、使い終わったグリーフシード手に入れたらまた交換してやるよ。」
「ん…了解。楽しみにしてる。」
確かに、このグリーフシード交換事業は良いかも知れない。
魔法少女全体に対して商売？になる。
魔女を狩らなくても回復できるのは画期的だ。
まー白いのからエネルギーを横取りしているようなものだが。
そこで私に電流が流れるがごとく閃いた！
そうだ、魔女化する際のパワー…あれ横取りしよう！
「……佐倉杏子。私の名前は佐倉杏子だ。あんたは？」
あ、自己紹介された。そうか、赤いのは佐倉杏子か。
さて、どう返そう。
中二病のごとく長文での返答とかどうだろう。…ないな。無い無い。
結局普通に名前だけ名乗った。
「……ジル。」
「ほーん。おkジル。宜しくな！」
そう言って、携帯の番号を交換して別れた。
……
マミの携帯だけどいいよね。
というか、マミの携帯。
学校しか登録無かったんだけど？
なんで、まどかとさやかの入ってないんだろう。
…こうして、平和的に杏子と別れてハッとする。
あ、虐めてないじゃん。

ステルス魔法を開発。
魔力感知、光学感知、熱探知、電波探知、生命探知、音響探知、重力探知。
遮断するのはコレくらいでいいかな。
思いつけるのがこれくらいだった。
コレ以外の探知方法があったら負けだ。どうしようもない。
いや探知方法が分かれば対策も打てる。
早速ステルス魔法を使う。
魔力の減りもとくに多くないので、問題ない。
よし、夜まで魔女狩りだ。
だけど、あんまり魔女居ないな。遠くには行きたくはないし。

…結局、見滝原？だったかに戻ってきた。
しばらくぶらぶらしていると、魔女が孵化した感覚が魔女探知にあった。
早速赴いてみると、ピンクと黄色の髪のやつ。そして黒髪の奴が順々に結界に入っていった。
マミとまどかとほむらか。
つまり、今日がマミる日か。よし。マミの石だけ回収だ。
ステルスのまま、自分も結界に入る。
入るとほむらが黄色いリボンで拘束されていた。はいスルー。
奥へ奥へと行くと、銃声が聞こえてくる。
最奥。魔女の間まで到達すると、マミが派手に戦っているようだ。
一方的に叩いているだけだが、黄色いリボンで拘束し、大砲でトドメ。
いつもの一連の流れだな。
そろそろか、と思い。ステルスのまま素早く近づく。
さっと宝石と髪の毛をゲットした時、マミが「えっ」っと小さくつぶやいた。
ああ、魔女の大口に迫られてたよ。うん。
で、パクパク食べられた。

私は素早くその場を離れ、デ・ラ・アドミラル空間へ移動。
宝石に擬似的な目と耳とスピーカーを付けた。
ダイヤル部分にソウルジェムがある黒電話みたいな形だ。白いけど。
受話器を上げて会話を開始しよう。
「やあマミ。調子は如何かな？」
『……え、私はいったい…ここはどこ？』
「ここはそうだな。吸血鬼結界の中？で、君は肉体を失った。
魔女にパクリと食べられてね。」
『えっ!?』
「今、君の魂はそのソウルジェムの中にある。それが今の君のすべてだ。」
『え？え？どういうこと…』
「思い出して？
さっきまで何をしていた？」
『…魔女との戦いで…私…私食べられて…』
「そうそう。その食べられてる時に君の魂…ソウルジェムだけ助け出したって寸法さ。」
思いっきり、ソウルジェムがにごり始めたのでグリーフシードで吸い出す。
吸い出した穢れとやらは、私が吸い出す。
え、コレなんて無限機関？
魔女化しないように追い詰めようかな。
「落ち着いた？
今の君はその宝石の中にいる。
肉体はない。」
『っ……!』
「安心してとは言わないけど、肉体は別のものでも大丈夫、用意する。
とりあえずはそのままで。
あと、外も見れるし、聞こえるようにはする。

でも会話は私とだけになるかな。」
ククク。魔女の真実を知り、私にだけ絶望の悲鳴を聞かせてほしい。
『そ、そう。
……え？あなた……ジル…!?さん？』
「そうだよー」
『吸血鬼だという…あの。』
「そうだよ。……そんな吸血鬼に助けられて、ねえねえどんな気持ち？」
ＮＤＫできた。嬉しい。
ああ、いい感じで罵詈雑言を言ってくるんだろうな。
楽しみ楽しみ。
『…ごめんなさい。
私、勘違いしてたみたい。
前は、いきなり攻撃しちゃってごめんなさい？』
……はい？
「いきなり撃たれたりしたね。」
『ご、ごめんなさい。』
うーん？罵詈雑言はどうした？
『吸血鬼も、新手の魔女かなって思ってしまっていて……』
「……」
『あの魔女に食べられた時点で、終わってしまったハズの私を助けてくれて、ありがとう…』
あ、あの。お礼……あれ？
くっ、良いや。
魔法少女の真実を見せつけてやろうじゃないか。
ククク。いつまで魔女化しないで耐えられるかな。
「暫くは対応策が思いつかないから不自由すると思うけど、アクセサリになっててね。宜しく。」
『分かったわ。宜しくね。』
なんか方向が違うな。なんだろコレ。

8．宝石（マミ）が、ただひたすら煩い件

こんばんは。ジルです。諸君。ちょっと聞いて欲しい。
なんか、宝石ユニットだけの奴を連れて歩いているんだけど、煩すぎるんです。
どうすればいい？
あの後、マミさんがマミったのを、まどかとさやかが悲しんでいる場面にステルスで遭遇。
宝石マミが『ごめんなさい。』をひたすら連呼した上に濁っていくもんだから2回ほどグリーフシードが満タンになった。
こやつ何回魔女化すればいいんだってくらい濁ってましたよ。
あと苦かった。（重要）
マミの濁り具合だけでＨＰ１００万くらい回復したんだけど。マジこいつだけで良い気がしてきた。
それからずっと、壊れたスピーカーみたいにゴメンナサイしか言わないので放っといて、夕飯を探しに出かけた。
延々と私にしか聞こえないんだけど、ゴメンナサイ言い続けてて、煩いのなんの無い。
この宝石マミは現在、チェーン通して首からぶら下げていて、私の視覚と聴覚をリンクさせている。
マミの会話は念話で、こちらからの声は私の聴覚から入る。だから会話は傍から見ると独り言。
イマジナリーフレンドとの会話という事になるのでステルスの重要性は絶大だ。
さて、魔女レーダーに従って移動すると、結構遠くの土地まで来てしまった。
ククク…魔女狩りの時間だ。
誰かのシマとかそんなの知らん。
すっと魔女結界に入ると、『えっ？』とマミが正気に戻る。
すたすた進むと使い魔が現れるも、とりあえず宝石マミだけ手で守りつつ、服を守るために全て迎撃。むんずと使い魔を掴むと吸える奴

は吸う。
機械みたいな見た目のやつは破壊する。
『えっちょっと待って、ここ魔女結界？え？』
「なんだ、正気に戻ったの？」
絶賛交戦中…いや駆除中。敵の遠距離攻撃がうざいので、魔法の死爆で撃ち減らす。
「死爆！死爆！しばく！死爆！」
使い魔はどんどん数を減らしていく。
『え、すごい…でもなんで魔女結界に？』
「ちょっと黙ってろ。」
雑魚どもを撃ち減らすこと1分半。
全滅させたので最奥に向かって歩き始める。
『すごいものね、戦い慣れているみたい。』
「いや、戦い慣れては居ないぞ。」
『ええっ？』
いや、防御とか考えないで、ただ魔法釣瓶撃ちするだけとか、戦いじゃなくて駆除とか虐殺とかそういう方向だ。
相手の刃が此方の命に届かなければ、そもそも戦いとして成立しない。
そういう意味では、初戦はランスとの戦いであり撤退戦だ。
白星しかないな。
『あんなに、使い魔を蹴散らしていたのに？』
そういう事を考えると、そもそも戦闘は得意ではないとなる。
強いのに戦闘は不得意。これは結構あるあるだな。
しかし、意図せず戦いになる場合があるので、後々鍛えていきたいと思う。
「あれは駆除だ。戦いじゃない。
蚊を潰す程度のことを、お前は戦いと言い張るのか？」
『蚊……』
ほんとそれ。蚊は吸われると痒くなるが今のはそれがない。
群がる蚊をパンパン手を叩いて潰して回っただけの感覚で、むしろ

撃ち漏らしをわざわざ狙い付けて叩かなければならないあたりも、逃げる蚊を追う感覚だ。
さて、そうこうしていると魔女の間に到達。でっかいぬいぐるみのような奴が現れた。
『っ！気をつけて、魔女が居るわ。』
「知ってる」
進むと、飴とかステッキチョコなどが攻撃として降ってくる。が、無視。
頭には当然当たるが服に当たらないなら、どうでもいい。
ぬいぐるみまで進み掴むとおもむろに吸う。
『あぶ、……え？あ、あぶな！……えええっ？』
マミ煩い。
中に液体があった。苦い苦い味だ。
ちゅうううううううううううう……ぽん。
『ええっ!!す、吸ってる!?』
ぬいぐるみなのに液体が出るのは変な感じ。苦い茶を飲んでいる感覚だった。
「にがっ」
口を離すと、魔女結界は崩壊し通常空間に出る。グリーフシードは回収した。
そして手早くステルスを発動させる。
『た、倒したの？』
「よし、今日はこんなもんで良いかな。」
『こんなもん…え？』
「さあ、帰るよ。というか、さっきから煩かったよー」
『煩いって、え、どういうこと？』
「魔女狩った。以上」
『いやいや、もうちょっと説明しなさいよ。
そもそも、どうして魔女を狩っていたの？それにさっきのは一体。どうやって倒したの？
というより、いきなり魔女結界入ったわよね。どうやって分かった

の？
あとここ見滝原じゃないじゃない、何処よここ。』
元気になったと思ったら、ゴメンナサイ連呼マシーンが、質問連打マシーンに変わってた。
「めんどくさい…」
『め、面倒くさいじゃないわよ、
一体なんなの！ちゃんと説明して！』
ドンびくわー。
質問畳み掛けないで欲しいんだけど。
マジめんどい。だからボッチだったんじゃないかな。
「はいはい、後でね。あと私これからスーパー行くから、回答できないわよ。」
『△■※％▼□!!!!』
はい雑音雑音と。
その後スーパーに行くと、宝石マミは黙った。
ふう、やっと静かになった。
そして、しれっとマミの部屋に上がる。
『待って、え？なんで入れたの？え？待って？』
「合鍵あったから。
住処無いから助かる。」
『ちょ、ちょっと！勝手に!?』
「前に泊まらせてもらった時、預かった筈。」
『あーあー。はいはい。あったわね、確かに。』
そうじゃないと、魔女狩り体験ツアーに鍵閉めて行けないじゃないか。
ということで、カップ麺食べて…寝る
お湯を注いで3分……
クッ魔王を待たせるなんていい度胸じゃないか、カップ麺。
『その前にジルさん。』
タイマーかけて……なによう。
「なに？」

『あんなに強いの、黙ってたのね？』
「別に、私は弱いとも強いとも言っていないよ。
魔女狩りツアーも、別に良いって断ってたじゃない。」
『あ、あれはその…ねえ』
「マミが私の実力を見誤って、勝手に弱いと見下していただけ。でしょ？」
『う……』
『魔女の血？というか吸っていたわよね。』
「吸っていたね。」
『あれが食事？なの？』
「食事といえば食事だね。」
『それなのに、ソレ食べるのね？』
「貴女だって、ご飯食べた後に甘いもの食べるじゃない。別腹よ」
『え？そんななの？』
「違うけど、ご飯食べて寝ると回復する。血を吸うのも回復する。いま回復させたくて仕方ないのよ。」
『回復って、体の方は問題ないみたいだけど？』
「体力が…最大値の１％未満状態。
おかげで、全能力値―９０％ペナルティ中よ。」
『１％未満って…あれだけ吸ってて？』
「うん。あれだけ吸っててまだまだまだ足らない。」
『……』
あ、３分だ。
はむはむ、ずるずるずるずる。はむはむ。
『……それで、人の……人の血は吸うのかしら？』
「吸えなくもない。」
『吸えなくも？』
「人の血を啜ったところで、魔女の１／１００も無い。なら魔女から吸ったほうが良い。」
まあ、人間のほうが美味いとは思うけどね。
『……そ、そうなんだ。』

ごくごくごく。
ぷはー
「魔法少女のはまだ吸ってないから、今後機会があったら吸ってみたいな。
ああ、撃たれた時、マミから吸っておけばよかった。」
『えっ!?』
「しっぱいしっぱい。じゃ、寝るから何かあったら起こしてね。」
『ええっ!?』
宝石マミをテーブルの上に置いて、私はベッドに入って寝る。寝た。
ほんとダルい。餌だけ運んできてほしい。
『ちょちょっとーーーーえ、私どうすればいいの?え、暗い!
ああ、ジルさんが、目を閉じると暗くなるのね。
ちょっと、暗いんだけど。
え、ほんとどうすれば…
私寝れるのかしら。
寝れる?…あれ?寝れない?』
煩いんだけど…
仕方ないので、TVを付けて、ヘッドホンとカメラを宝石にセット。
「じゃ、おやすみ。」
まったく手を煩わせて…。
『あ、ありがとうね……
……ぐすん。ほんとうに。
からだ無くなっっちゃったんだ。はぁ…ぁぁぁ…ぐすん』
TVつけたんだからいいだろ!煩い!

おはようございます。
ジルです。

なんで、昨日はイジメなんてしようと思ったんだろう。
イジメカッコ悪い。
「おはようマミ」
『あら、おはようジル。』
……呼び捨てか。
まあ良い。一瞬、熱湯入りの紅茶ポットの中に投げ入れてみようかと思ってしまったが…。
何かを乗り越え、吹っ切れたのだろう。
安心したまえ。今日の私の機嫌は非常に良い。
「まあ聞いてくれ。
やっと1％回復したんだ。」
『え?、やっと…?』
そう。やっとＨＰ８００万超え。８，０００，０００　／　８００，０００，０００　ゼロが多いと分かりづらいな。
８Ｍ／８００Ｍ　とすれば分かりやすいか。
「さあ、今日も魔女狩りで回復だ!」
『え、ええ。頑張りましょう…』
重衰弱は２５％回復で解消。衰弱になる。５０％回復で衰弱も解消になるから先は長いなぁ。

こんばんはこんばんは。
夜まで魔女を狩り続けて４件。ホクホクです。
さてあと1件くらい狩ってみたいけど……もう帰ろうか。
で、見滝原に到着。
おうちに帰るのだよ。って思ってると魔女結界の反応である。
ピタリと足を止め、そして方向を変える。
『……どうしたの?』
「本日、最後のお仕事。」
『ああ、また魔女結界ね。』
「そそ。」
すたすた歩くが、なんだろう。ピンク髪がのやつがオロオロと倉庫

の中に入っていくのが見えた。
まどかが魔女に絡まれたか、ん？
こんなイベントあったような無かったような。
『まずいわ。中に結構人がいるわ。なんとかしないと。』
「そうね…」
しかし慌てずに向かうと、なにやら騒ぎが起きているようだ。
『一体何が…助けましょう！』
体がないのに良くまあ頑張るね。
と、様子を見ていると、近づく人…いや魔法少女の気配。
ここは彼女にまかせてしまおう。
どうせ彼女だし。
『どうしたの？』
「魔法少女だ。」
『えっ!?』
「うーん。ここで絡んでも良いけど。今日はお預けだな。様子だけ見ておこう。」
『そう？
でも誰かしら。見滝原で魔法少女なんて私しか居なかったはずなのに。
キュゥべえが誰か呼んだのかしら。』
知らんがな。
さて、魔女結界にステルスで突入。
すると、青い髪の魔法少女が、丁度まどかを助けていた。
『うそ！さやかさん!?』
「うん。あれは確かに美樹さやかだね。彼女魔法少女になったんだ。」
『私が不甲斐ないばかりに…』
さやかをストーキングしていたら魔法少女の真実が見れるはず。
クックック。その時のマミの反応が見ものである。楽しみだね。
しばらく張り付いていようかな。
まどかを助けたあたりで会話を拾える辺りまで近づいてみた。

「いやーゴメンゴメン。危機一髪ってとこだったねぇ」
「さやかちゃん…その格好」
そうですね、魔法少女ですね。
「ん？あーはっは、んーまあ何、心境の変化って言うのかな？
大丈夫だって！初めてにしちゃあ、上手くやったでしょ？私」
「でも…」
と、来た来た。丁度会いたかったんだよね。
暁美ほむらさん。このあと会話したいな。
「あ！」
っと叫ぶのはさやか。
「貴女は……」
「ふん、遅かったじゃない。転校生」
『あの娘……行っちゃった。』
「追いかけるよ！」
という事で、まどかとさやかを放置して、ほむらの方をストーク真後ろにセット。
まどか達から十分離れたところで、ステルス解除して話しかける。
「こんばんはー」
「っ！」
彼女は、ばっと振り向いて間合いを取る。
なんで、銃器取り出すかな。
「貴女は…」
「こないだは自己紹介も無かったかな。ジルです。」
「……暁美ほむらよ。」
「はい、こんばんは。」
「それで、何の用かしら？」
「ええ、ちょっと交易に来ました。」
「交易？」
「この、未使用のグリーフシードと、貴女の持っている使用済みグリーフシード。
交換しない？」

「……どういう事かしら？
それ、あなたに何のメリットが？」
「ああ、じゃあ交換してくれたら、何に使うか実演しましょう。この場で。」
「まさか、魔女でも孵そうなんて考えているんじゃないでしょうね。」
「そんな事考えてないよ。」
「……」
ジト目でこちらを見ているな。何考えてんだろう。
「わかったわ。」
とりあえず、了承が得られたのでグリーフシード1つを投げ渡す。
「……」
ジロジロとグリーフシードを見る。
それで確認できたようなので、使用済み…というか使用中のグリーフシードを投げ渡してきた。
「じゃあ、実演するわね。」
いつもどおり、ちゅるちゅると吸う。
……から！
辛い!!!!
なんで辛いの!!!!
「辛いわね。」
冷静に答えるけど、全部吸ったら、相当の辛さだった。しかもしょっぱいのもある。
辛子と塩を混ぜて食べるとこういう味かもしれない。
「辛い？…貴女、グリーフシードを浄化できるの？」
「いえーす」
「……本当に何者なの？」
『ほんと、非常識よね。』
マミからもツッコミが入る。
何者もなにもなぁ…無難に答えても信じないしなぁ。
うーん。仕方ない。今こそ中二病的名乗りをしても良いかも知れない……

って、なんで度々この選択肢が出るの!?
ううん駄目。はずい。
だがはぐらかすには丁度いいし、脅威には感じるが魔女ではないから敵ではないと知れるだろう。
メリット＝敵とは思われない。はぐらかせる。でも嘘はついていない。
デメリット＝はずい。ただただひたすら恥ずかしい。
くっ、恥ずかしいだけがデメリットか。いいでしょう。
や、やったらーーー!
「ククク…
我が前で生きていらりゅりゅ…」
かんだ…
「……」
『……』
手のひらををほむらに向けて顔を下にする。
ちょっとタンマ。
はい、気を取り直して……
テイクツー
「クックック
わ、我が前で生きていられる事に感謝せよ、
我が名はジル…五代目魔王にして吸血鬼である。
敵対するものには等しく絶望をくれてやろう。」
格好もつけて、どやぁ～～
…ただし顔真っ赤～～
『魔王!吸血鬼にして魔王だなんて!
道理で、こちらの攻撃が効かないし魔女を簡単に狩れるわけね。』
「……はぁ…それで。その茶番は必要だったのかしら?」
マミとほむらで反応が違う件。
あれ?なんで?
なんではぐらかされないの!?
おっかしーなー。はぐらかせると思ったのに。(尚、マミ基準)

「……」
「……」
『え？…え？ちょっと、どういうこと？え？魔王あれ？茶番？』
くっ。仕方ない。
「コホン。
あーそれでね。色々できるので、グリーフシード浄化事業とかしようと思うの。」
「はぁ」
ジト目で見てくる。
「だから、ほら、番号交換しよ？」
「……まあ良いでしょう。
グリーフシード浄化できるのは助かるし。」
よし、なんとかはぐらかせた！
恥ずかしい想いした甲斐があったわ。
『え？ちょっと、そのスマホ私のじゃない。』
自宅に置きっぱにして学校行くお前が言うなし。
はい。
という事で２つ目の魔法少女電話番号げっとー
「相変わらず貴女の目的が知れないけど、とりあえず浄化にはメリットがあるからつきあってあげる。」
「はいはい。じゃ、グリーフシード溜まったらよろしく！」
「今度は貴女の正体と目的。正直に教えてくれることを願うわ。」
と言ってターンして帰っていった。
はい、ほむターン頂きました。
ごっつぁんです。
てか、はぐらかせてないじゃん。カッコつけて名乗ったのにぃ！
『それで、ねえ、さっきの魔王とかなんとか、茶番とか一体なんだったの？』
ああ、これから説明が大変になるのね。
現在のＨＰ　１２Ｍ／８００Ｍ

9．ククク…これは魔女化が早まってしまうかも知れないな。

こんばんは。ジルです。
順調に回復していってて、かなり良いですね。
昼間は魔女狩りで、夜はさやかストーキングで遊んでいます。
今夜はパトロールという事で、まどかとさやかが一緒になっていました。
遠くから見張っていると、使い魔の方の結界に突っ込んでいきまして、逃げられたようです。
指差して笑ってたら、佐倉杏子とさやかが戦っていました。
なにゆえ…ああ、あったねそんなイベントも。
『どういう事!?
あの娘…佐倉さん。なんで、さやかさんと…』
相変わらず、煩いですよね。マミ。
『なんで戦って…』
「まあ、よくある喧嘩でしょう。あるある。」
『あってたまりますか！早く止めに行かないと。』
「いいんじゃん。殴り合った結果、仲良くなることもあるさ。」
『そ、それは…あるかもしれないけど!!でも、さやかさんでは佐倉さんには勝てないわ。』
ああ、年季が違うからねぇ。
「いいじゃない。負けても。死ぬわけじゃなし。」
『……死ぬかも。死ぬかもしれないじゃない。』
マミとやいのやいの言っていると、黒いのが助けに入る。
『え?……あの人は…。
キュゥべえを追っていた子。…あと交易した子』
「暁美ほむらさんね。」
明らかに瞬間移動か何かして相手を翻弄している。
そして、美樹さやかをノックアウト。

『まともに戦ったら大変な相手ね。
なぜ私のときは…はっ！』
はい、拘束に弱いの気付いちゃいましたね。
まあ、文字通り手も足も出ないんだけどね。
「さて、喧嘩も終了したし。帰ろう。」
そんな感じで本日は終了。

翌日も魔女狩りして夕方から、さやか探し。
はい、サクッと見つけたと思ったら、佐倉杏子と対峙してた。
そして戦う前にまどかが乱入。あと暁美ほむらも乱入。
『また、衝突するのね。
一体なんでこんな事に……。』
マミはかなり独り言が煩い。対応するのが面倒なので
私は生返事くらいしか返していない。
まあ君は声しか出ませんからね。
と、そんな感じで私は話が聞こえる所まで近づく。
「話が違うわ。美樹さやかには手を出すなと言ったはずよ」
ほむほむ。何か協定でも組んだんですかね。
「アンタのやり方じゃ手ぬる過ぎるんだよ。どの道向こうはやる気だぜ」
杏子ちゃん手が早い派なのに、なんで私のときは手を出さなかったんだろう？不思議だね。
『…もう戦いは避けられないというの？』
マミも心配で見守っている。まあ、ちょっかい出せないしね。
「なら、私が相手をする。手出ししないで」
「ハンッ、じゃあコイツを食い終わるまで待ってやる」
どうやら選手交代のようだ。
まあ時間停止で瞬殺できるからな。
「充分よ」
「ナメるんじゃないわよ！」
その言葉を受け、さやか激怒り。

プククク……
で、予定通りか。
「さやかちゃん、ゴメン！」
「うぇいっ」
ぽいっとな。
驚いたほむらが、荷台に乗ったソウルジェムを追いかけに行った。
「まどか！あんたなんて事を！」
「だって、こうしないと」
『…まあ、戦いは回避できたわね。でもソウルジェム追わないと。』
「ほむらが向かった。大丈夫でしょ？」
『そう？』
マミはソウルジェムの心配。
さあ、来るぞ。マミの精神は耐えられるかな!?
そっと私はグリーフシード5個を、マミのソウルジェムの周りに配置した。
そこで圏外。さやかが倒れる。
「え…さやかちゃん？」
そこに白い宇宙人が現れる。
まあ奴も想定外の動きなんだろうけどな。
「今のはマズかったよ、まどか。
よりにもよって、友達を放り投げるなんて、どうかしてるよ」
「何？何なの？やめてっ」
まどかがオロオロしてて、白いのの言葉が耳に入っていないんじゃないかな。
「どういうことだオイ…。コイツ死んでるじゃねぇかよ」
杏子がさやかの首を持って持ち上げる。
心拍数。それで計れますか？
『え、どういうこと!?』
マミも動揺を隠せない。オロオロし始めた。
「えっ？……
さやかちゃん？…ね？

さやかちゃん？起きて…ねえ、ねえちょっと、どうしたの？
ねえ！嫌だよこんなの、さやかちゃん!!」
ああ、良いね。まどかの方のも良いです。
ごっつぁんです。
『そんな…さやかさんが…』
「何がどうなってやがんだ…オイッ」
杏子が白いのを持ち上げて問い詰める。
「君たち魔法少女が身体をコントロールできるのは、せいぜい１００m圏内が限度だからね」
うん。知ってた。
『１００……メートル？』
「１００メートル？何のことだ、どういう意味だ!?」
「普段は当然肌身離さず持ち歩いてるんだから、こういう事故は滅多にあることじゃないんだけど」
「何言ってるのよキュゥべえ！助けてよ、さやかちゃんを死なせないでっ!!」
「はあ…まどか、そっちはさやかじゃなくて、ただの抜け殻なんだって」
『…ぬ、抜け殻!?』
ククク。
「え？」
「さやかはさっき、君が投げて捨てちゃったじゃないか」
あくまでキュゥべえはまどかにご執心ですね。わかりやすい。
「な…何だと？」
『な、投げ捨てたのは』
いやー久々の愉悦ですなぁ。
「ただの人間と同じ、壊れやすい身体のままで、魔女と戦ってくれなんて、とてもお願い出来ないよ。
君たち魔法少女にとって、元の身体なんていうのは、外付けのハードウェアでしかないんだ。
君たちの本体としての魂には、魔力をより効率よく運用できる、コ

ンパクトで、安全な姿が与えられているんだ。
魔法少女との契約を取り結ぶ、僕の役目はね。君たちの魂を抜き取って、ソウルジェムに変える事なのさ。」
キュゥべえ、説明長すぎワラタ。
さあさあ、真実その1を知って、マミさんはどうなるかなわくわく。
『……』
ほう、ほう。
意味を反芻して飲み込んでいる段階かな？
もうちょい待とう。
「テメェは…何てことを…。ふざけんじゃねぇ!!
それじゃアタシたち、ゾンビにされたようなもんじゃないか!!」
『!!』
ゾンビ。ゾンビねぇ。ゾンビとは違うと思うけどね。
杏子の方も愉悦である。満足満足。
「むしろ便利だろう？
心臓が破れても、ありったけの血を抜かれても、
その身体は魔力で修理すれば、すぐまた動くようになる。
ソウルジェムさえ砕かれない限り、君たちは無敵だよ。
弱点だらけの人体よりも、余程戦いでは有利じゃないか。」
『そう…そうなのね。』
うんうん。マミさんのショックはどうなるんだろうな。
まだかな？まだかな？リアクション待ちしてるんだから、はよはよ。
「ひどいよ…そんなのあんまりだよ…」
「君たちはいつもそうだね。事実をありのままに伝えると、
決まって同じ反応をする。
訳が分からないよ。
どうして人間はそんなに、魂の在処にこだわるんだい？」
白いのの、説明長すぎてほむらさんが戻ってきてしまったぞ。
「ふーん。」
ステルス状態で、腕を組んで納得したフリをする。

『…なんとなく、そうなんじゃ無いかと思っていたわ。』
ハイ？
『私を救い出してくれた時、魂の全てがここにある。
そう聞いていたから、多分最初から…魔法少女になった時から、
ソウルジェムに魂が全て込められている。
そう思ったし、感じているもの。
だから、きっとあの私の肉体は動くための端末でしか無いとはなんとなく。
そう、なんとなく感じてたの。
まあ、この状態で過ごしてきたからこその感想だけどね。』
ち、ちっがーーーーーーーーう！
そうじゃないでしょ、もっとこう、まどかとか、杏子みたいに悲しんで怒ってくれよ！
なんでなの？なんで納得しちゃうかなぁ!!!!
あーもう、なんか白けた。帰ろう。
……
結局マミが発生させた穢れはなく、グリーフシードは空っぽのママでした。
無念。

皆さん、ふたたびこんばんは。
はい、そういうことで目論見の一つが潰えてしまったジルさんですよっと。
ＨＰは３％まで回復している。順調です。
次の真実で、マミを堕とす。うん。がんばろう。
さて今日は遠出して夜まで魔女狩りをした。
夜、さやか探しをしたが、ボロい教会に杏子と入っていくのを見て立ち去る。
マミも争う気配が無いと見て何も言わなかった。
あー、あいつ、何時魔女化するんだったっけな。
魔女化すると分かってて待っている私もなかなか非道だな。

まあ、接触するほどじゃないでしょう。
じゃ、また明日。

翌日になったよ。
そしてまた、こんばんはです。ジルです。
今日も進展なんてあるはずも無いから朝から晩まで魔女狩りです。

今も狩りに……おやあ？
なんかこの魔女見覚えがあるぞ？

「あ、あんたは！」
げ、さやかとバッティングしちゃった。
『さやかさん。』
「ふむ……」
「あんたは吸血鬼？だったっけ、生きてたんだね。」
ああ、ティロ・フィナーレ喰らいましたからね。ええ。
「貴女は……ああ、さやかさんでしたっけ。魔法少女になったのです？」
「っ!!!
…そ、そうよ。」
「まぁ剣は向けず落ち着こうか。」
「魔女ではないけど、化け物なんでしょう？だったら…」
「はぁ？前ならともかく、人外なのはお互い様って奴じゃない？」
「っ……！」
と、少し追い込んでみようか。
「た……たしかに…そうかもしれないけど…。
だけど、人の血を吸うお前なんかを、見逃す訳にはいかない！」
おー、正義感つおいですね。
おちょくれそうだが、さてさて、少し追い込んで見ようか？
「別に、人の血なんて飲んでないぞ。」

「…え？」
「ちなみに、私が主に吸っているのは魔女の血で、ほら、こんなにグリーフシードが余っている。」
「なっ！」
「私ってば、魔女の血は吸うけど、回復にグリーフシードなんて使わないし。余って余ってしかたない。」
「!!!」
「で、どうしてもって言うなら、そうさな……
魔法少女の血、飲んでみたいかも。
一回吸血…1リットルごとに1個なんてどうだろう？」
破格だぞ～
「おい待て！そりゃあなんつう取引だよ。」
杏子が降りてきて会話に挟まる。
「!?」
「あら杏子、こんばんは」
「おうこんばんは。
って違う！
グリーフシード、血で交換するとかやっぱり吸血鬼だったな!!」
「そ、そうよ！とうとう正体を現したわね！」
さやかも少し元気になって会話に混ざる。
「へぇ、ならどうするのかしら？」
少々話の流れは違うが、ここでボコボコにしておしおきタイムにもつれ込むのも一興か。
よし、それでいこう！
「くっそ、一リットル1個だと！
……10リットル分交換でお願いします。」
ペコリと杏子がお願いすると、さやかがエー…みたいな顔をして杏子を見る。
「ちょ、ちょっとどういう事よ！」
「馬鹿野郎！1リットルの献血でグリーフシード1個もらえるんだぞ！

すげえ破格じゃねえか！
魔女を探して命がけで戦うんじゃねえ。たった一リットル献血するだけで良いんだぞ？」
「!!!
!!!」
そのとき、さやかに電流走る。的な表情になった。
なんでだよ！敵対するんじゃないのかよ!!
『その言い方は確かに。言い換えると…お得に感じてしまうわね。』
自分の方は言い方、悪くしてたんだけどなぁ。
「た、たしかにそういう風に言われればお得かも。」
さやかが納得しかけたとき…
「君が一体何を考えているかわからないけど、
魔女を狩り続けている。他の魔法少女の迷惑をかけている自覚はあるのかい？」
はい、白いのが来た。
今はステルス解いてるからね。
あと、いちおう無敵結界も今回は解いている。
観測されたら困るからね。
多少の傷は大丈夫になったしな。
「別に、魔女を狩って困ることなんてあるの？」
「他の魔法少女達がグリーフシードを得られない。そこに問題があると言っているのだけれども？」
はい、嘘は吐かないけど本当のことも言わない。
インキュベーターさんの会話はとても為になりますね。はっ！反吐が出る。
「魔女からも吸血し、しかしグリーフシードは使わない。
人から、魔法少女から、魔女から血を吸っている。
君はこの星に住むもの全ての敵…なんじゃないかな？」
ほーう。イイネ。
なんとか魔法少女を敵対させる方向にもっていき、さやかと、ひいては杏子へグリーフシードが回らないように注力しているか。
余程私が邪魔と見える。

てかさ、インキュベーターもこの星に住むもの全ての敵だろうよ。
自覚無さそうだけど。
「なっ！
そ、そうだよ！こいつは人の天敵の化け物なんだよ！
生きているだけで害悪なんだ!!」
さやか単純だなぁ。
『…うわあ…』
マミがうわあって、お前がやるなよ。
ふふん。だが。
私にはとっておきがある。
「化け物とか害悪とか、言ってくれるじゃないか。」
「おい、さやかやめろ！
聞いていたのか？グリーフシードとか提供してくれる良い奴なんだぞ！」
杏子はブレないねぇ。
「私とて、人だった時期はある。」
と、右手にある長手袋の先端。中指をつまむと…
ドドド…
なにが……
痛くはないけど、なんか後ろから攻撃くらった。
暗い。
「ああ！魔女が！」
「お、おい大丈夫か！」
「ひっ！」
と、さやか、杏子、まどかの順ですがリアクション頂きましたと。
「ふん！」
魔女の黒い触手を吹き飛ばす。めんどうなのでさくっと魔女に近づき、かぶりつく。
ちゅうううううーーーーーーーっぽん。
吸血して、はい、おしまい。
「全く会話に割って入るとか残念な魔女だな。」

「なっ！」
「なんつう強引な戦い方だ。」
まーったく、被弾したせいで服がボロボロだ。
手足の長手袋や長いソックスもボロボロだよ、トホホ。
「またせたね。」
「くっ…」
「さやかちゃん、やめようよ。お話できるんだから、きっと敵じゃないよ。話せばわかるよ。」
「だって、こいつ吸血鬼なんだよ！」
さやかだけは敵意があるねぇ。
どんだけ偏見あるんだろうね。
よーし、さやか追い込み作戦だ。
まず、元々人だったと言っておいて、両手両足の黒いのを見せる。
その後、これは魔力でできた義肢だと宣言。
まあ嘘ではないしな。
両手両足は切られたもので、その際拷問と陵辱の限りをしつくされた上で、危険な野生動物のいる場所に捨てられたと言おう。
誰がやったか想像させ、その上で人間にやられたと言って人間に対して絶望してもらおうじゃないか。
ククク。
これは魔女化が早まってしまうかも知れないな。
ついでに助けたのは吸血鬼で、魔女なんて苦いだけで美味しくもないんだと言おうか。
よし、これで良いな。

するりと私は両手両足の手袋とソックスと脱ぐ。
「!?なんだ、その手足は。真っ黒…だな。」
「ええ、杏子。
これは魔法でできた手足。義肢よ。」
「なんだって!?」
って、杏子が答えるんかい。

「元々人間だったと言っていたよね。
そう、人間だった時に切り落とされたものだ。」
「!?」
『そんな！』
ええい、マミまで反応するな。
「その時何をされたかわかるかな。
爪を一枚一枚剥がされ、手の先から寸刻みで切られていく…
そんな拷問と、陵辱の限りをつくされた。
そうして手足をもがれた私は野生動物のいる場所に捨てられた。
その後どうなるかは想像に難くない。
なあ、コレやったのだれだか分かるかな？美樹さやか。」
「!!!
そ、それは…吸血鬼がやったんだろ？もしくは魔女が。」
良いミスだ。想像通り。
「ククク…
人間だよ。
人間が！
ああ、学業で成績の良かった私を妬んだ人間がそんな事をしでかしたわけだ。」
「そ、そんな…」
うんうん。想像通りのいい表情だ。
さあ、人間に絶望するがいい!!
「ちなみに、私を助けたのは吸血鬼の王で、
手足を魔力によって補えるようにしてくれたのも吸血鬼の王だ。
さて、美樹さやか。私が害悪だと言うけど。
一体…
邪悪なのはどちらなのだろうね？」
吸血鬼の王とは魔王。嘘はついてなーい。
「っ……!!!」
うんうん。いい表情だ。杏子もいい感じだな。
『そんな…ことが…』

マミの表情が見れないのが残念。
「人が憎いから…
人を襲って…血を、吸うの？」
ハァ？何聞いてんだこの馬鹿は。
「人なんて襲ってはいない。
吸ったのは魔女だったろう？
さっきのだって、正当な取引だったじゃないか。
嫌なら拒否すればいい。
でさあ、人は襲ってない。魔女は倒す。
吸血の際は取引をもちかけるだけで襲わない。
ねえ、私の何処に悪いところがあるのかな？」
と、自己弁護してしまった。
旧ジルさんに倣い「人を壊すの愉しいです」
って言えば良かったか？
…あ、全員敵対するや。それにさやかを絶望させないと。
「…!!!」
いい表情だ。
魔女化するかな？するかな？わくわく。
「そうか、そうだったのか…
私、貴女のこと勘違いしてたみたいね。」
んん？
あれ？絶望は？
「吸血鬼は悪いものだって、そう思い込んでたみたい。」
お、おう…
「私一人がひどい目に遭ってて
私一人が救われなくなったって……そんな風に思ってた。
ありがとう！
少し元気になったよ。もうちょい頑張ってみる。」
え、まって
何その結論。
「あー。そうだよなぁ、不幸話ってのは確かにあれだけど、それなら吸

血鬼であっても好意的に見れるな。」
え、ナンデ？
おい、どういうことだ!?
『陵辱ってあの陵辱？
ヒドイ！純真な乙女の花を散らした挙げ句…まだ宝石だけになってた私の方がマシじゃない。』
え、待って。
もしかしてもしかして。
自分より不幸なヤツ見つけたから、それで同情したりして安心してるとか、そういう話？
え？
な…私が……よりによって、同情されている!?
「くっ…」
おぼえてろよーーーーー！
『ああ、居た堪れなくなって去ったのね。わかるわ』
くっそーーーーーー!!
あーーーもーーーー！
なんでなの!!?

１０．「へい、お待ち。グリーフシード丼ソウルジェム和え一丁あがり。」

おはようございます。
ついにシナリオ崩壊させてしまった残念ジルです。
いや持ち直したとはいえ、さやかだしな。
どうせ魔女化するだろう。
今日は魔女狩りやめて、さやかのストーキングするかな。
マミが魔女化しなかったら、さやかの死体にＩＮして使うし。さやかが魔女化しなかったらまどかがアルティメット化しないからな。
仕方ないよね。
キュゥべえ頑張って営業しろよー。こっちにくんなよー。
さて起きるか。
「おはよーマミ。
今日は……ギャ――――――――――――――――――――――！！！！」

びっくりした！
この私が不覚にもびっくりした。
いや、普通にビックリするよ。当たり前だ。
だって、マミの生首がテーブルの上にあるのだから。
何事!?
『おはよう、ジルさん。』
「念話!?、お？おはよう……これはどうした訳だ？」
テーブルの生首が動いている様子はない。
マジ不気味。血は滴っていないな。
『うん、ちょっと試してみたの。でも思いのほか魔力が必要で…
申し訳ないけど、グリーフシードをいくらか貸して貰えないかしら。』
「え？」
『これが上手くすれば、血で払えると思うから。』

「……え？え？」
待て待て待て。なんだ、なんで生首を…魔力で復活させているのか？
「ど、どうやって？」
『だって、キュウべえが言っていたじゃない。
心臓が破けたって、ありったけの血を流したって、魔力で修復すればすぐに戦えるようになるって。
だとしたら、例えば私の抜け毛でからでも、魔力さえあれば再生できる。
理論上は……
で、試したら思いのほか上手くいったのは良いのだけど、魔力足らなくなっちゃったみたい。』
天才とかじゃない。
これは…天然。そう天然の発想だ!!
キュウべえが言ったあんなセリフで、よくもまあ、ここまで発想できるものだ。
アホか！
あー信じられん。
確かにさー！
遺髪を元にパイアールあたりに再生させるとか、命令しようと思ったけどさーーー！
なんで、髪から再生させようなんて思ったんだろうな。

だが、まあ…グリーフシード余ってるし。

「クククク。
いいだろう。
グリーフシード全17個。全部使うがいい！」
生首を横に置いて、ソウルジェムを抜き出し、どんぶりに入れる。
そのどんぶりにグリーフシードを入れる。
グリーフシード丼ソウルジェム和え。

って所か。って何やってんだろ。
『ありがとう…』
するとマミのソウルジェムが輝き、生首から、体の下が順々に生えていく。
うわあ…
うわあ
グロイなぁ…
これ、まどかとか見たら卒倒だな。
死体とか、生きたまま解体とか常日頃やってるジルみたいなのの中に居なかったら、きっと耐えられないだろうな。
まあ、だから私は余裕だが。
だいたい30分で全身が再生した。
血はまだだったようで、しばらくしてからビクンと体が跳ね、心臓が動き出した。
「……ああ、体がもどった…。」
「うん。……おめでとう。」
呆然としつつ復活したマミを見る。マジやっちまいやがった。
おいこれ、復活したぞマミ。
どうなってんだ？
シナリオに無いぞ……
この部屋、干渉遮断結界を張っといて良かったよ。
まじキュゥべえにバレたら、何をされたことか。
「念話も終わりね。
とても…助かったわ。」
「お、おう…」
ふむ…満タンになったのはグリーフシード9個か。
それらが孵化しないように即座に吸う。
苦い…辛い？辛みが出てきたな。なんでだろ。
でもすげえ、1％分回復した……
43M／800M　順調なのは良いけどこれは何？って感じ。
「血は…あると思うから、存分に吸っちゃって。えっと9リットル？」

「あ…そっか。」
まあ、吸ったところで何リットル吸ったかわからないんだけどね。
一回あたり致死量ｘ９回でよかろう。
「ちょっと待って。全部吸うと何リットルになるのかな…えーと、マミ体重何キロ!?」
「そ、それは聞かないでよ！」
「そうしないと何リットル今あるのか分からないじゃない」
「……そ、そう。そしたら、▼▲キロよ。」
「聞き取れないよ。いいよ平均で。ネットで調べたら多４リットルくらいだから……なんだ少ないな。」
「４リットルしかないんだ。」
「なので、全部吸い出し２回するね？」
「ち、致死量なのよね？」
「あー復活は辛いのか。」
「結構つらいわ。１リットルづつ行きましょう。」
仕方ないので１リットルずつやってみた。
かぷっ…うめえ…魔法少女の血うまい。
なんというか、甘いとかまろやかとか、そんなのが合わさって美味い。
どうしよう。
今後もずっと魔法少女の血で良い気がしてきた。
だが、マミは気を失っていた。
一時間後…
「だ、だめ！０．５リットルずつにしましょう！」
気を失ったら連続して吸えないからな。
体に意識がある間は、宝石マミは稼働しないようだ。
なんかジルが死なさそうでギリギリ死んでしまうあたりに吸うのが１リットルちょいだったな。
ここら辺は相手の体重とか体調に左右されるから見ながら吸ってた。
まー主導権が無い時は味、わかんなかったんだけどね。

でも、とりあえずごくごくと飲む。
マミが魔力で回復する、そして飲むを繰り返し9リットル終わりごろに
「ごめんなさい。グリーフシード、もう一個いいかしら？」
魔力使いすぎてソウルジェムが濁ってきてた。
ああ、なんかピンク色に濁ってて分からなかったんだ。
吸わせたグリーフシードからの味が甘辛かった。なんでなの。
「はい、１０リットル。」
「はぁはぁ…うん。これで契約は完了ね。」
上気させた表情は少し色っぽかったが、吸血鬼に吸われるって、どんな感覚なんだろうね。
「そうだね。」
「また…何かあったら、グリーフシードお願いね。」
「……仕方ないな。」
とはいえ、暫くは戦場に戻せないな。
キュゥべえの動きが分からないからね。
「じゃあ、私の復活を教えて回らないと。」
うおい！
「待って待って！」
「え？」
「今しばらく、戦場は。いや…復活がキュゥべえに知られるのはまずい。」
「どうして？」
「キュゥべえは何かを隠している。
今回みたいな件、『聞かれなかったから答えていなかった。』とか言うに違いない。
なら、それを見極めてからでもいいでしょう？」
「……
確かに、そうかも知れないわね。
助けてもらった事もあるし、今しばらくは様子を見させてもらうわ。」

ふぅ、とりあえずは良しとしよう。
「とりあえず、今日はさやかに張り付いて、さやかの様子を窺おう」
「さやかさんの……確かに心配ね。わかったわ。」
念話じゃなくなったが連れまわす方向で実質は変わらない。
しっかし、どうするかな。
思いっきりシナリオから離れてしまった。

……
あ、こんばんは。
あ…いや、どういうことだ？
うん。ああ、解説するね。
いま、さやかが魔女狩りに来てるんだけどね。
杏子とほむらが一緒なんだ。
うん。３人で組んでる。
……
いつの間に仲良くなったんだ？
いや、仲良くなったのはさやかと杏子だが。
「うんうん。みんなで力を合わせるのは良いわよね。」
ステルス中のマミと一緒に魔女結界で見守っています。
すごい感激しまくってててうざいです。助けて。
「……うん、なんか問題ないみたいだね。」
「でも……鹿目さんまで連れてて大丈夫かしら。彼女、魔法少女の契約していないのに。」
それな。
まあ、危険だから家に居なさいって言っても聞かなかったんだろう。
……どうしよう、このまま仲良くなって、そのままワルプルギスの夜と戦うのか？
勝てる？
いや…どうかな。無理な気がするが。

あと何日猶予あったかな。
……
えーと、杏子とほむらが組んでだいたい二週間後に来るんだったっけ？あれ？一週間だったっけな？
さやかが時間無駄食いさせて問題を滞留させまくったおかげで、時間がつぶれてしまう。
最終的にほむらだけでは勝てない状況にして
アレは……まどかと契約するつもりだろうから、邪魔なのは……杏子か。
杏子だけでも潰しておきたいはずだ。
となると、マミをステルスで魔女狩りに尾行させておけば、アレの妨害もなんとかなるか。
それで、まどかを含まない４人でワルプルギスの夜と戦えばいい。
まー倒せないまでも頑張って撃退すれば勝ちだ。
でもその時ほむらも気付くだろう。
まどかが契約しないという事は、いつまで経ってもキュゥべえがセールスかけてくるって事に。
最悪、まどかを一人きりにして契約しないとヤバいって状況に追い込みかねない事に。
故に、ほむらにとって敵はワルプルギスの夜ではない。
アルティメット化しないルートの場合は大変そうだが……まどかが魔女化したら、果たして私は勝てるのかな。
魔法少女たちの絶望は楽しみだが、今後どうなるかストーリーから外れちゃったから読めない。
まあ、なるようになる。高みの見物といこうじゃないか。
で、アレの動きだが、私に対してはステルスってるし、単純に魔女狩って過ごしているだけだから契約の邪魔になるとは思っていないだろう。
ほむらほど絡んでもいないし。
ちょっかいをかけて来ることはあるまい。その情報が不足しているはずだ。

「ふむ、ちょいと日課の魔女狩りするので、マミは杏子について回ってくれ。」
「え？」
「なんとなく、キュゥべぇがちょっかいかけるのは杏子な気がするんだよね。」
「……そう？
まあ、わかったわ。このステルスのまま付いて回ればいいのね。」
「そう。」
「…………………
まあ、暗躍も意外と面白いから頑張ってみるわ」
「あ、いちおう、人魚の魔女に逢ったら戦わずに逃げるように。ではな。」
「？？？」
これでさやかが万が一魔女化しても、その場にほむらが居ない限りは分かるまい。
で、あとで魔法少女の真実2を知り、絶望することだろう。
うむ。よしイイね。
あと、他人の魔女狩り見てるのはめんどいしね。
自分は魔女狩りして回復に努めましょう。

…ああ。
ああああああぁぁーーーーーーーーーーーーーー
うるさいマミの呟きから解放されたぞーーーーーーーーーーーーーー！
やっほーーーーー！
え？煩かったから置いてきたんじゃないかって？
そうだよ、悪いか。
いやほんとうるさいんだヨ。
まあ、宝石ユニットだと、ホントこっち喋りかけるしか外界への接触手段無いからね。
仕方ないけどね。
じゃあ、ストレス解消に魔女退治といきましょうかね。

□□□□□□□ジル　HP　53M／800M■□□□□□□□□□□□□□□

11．白いの「魔法少女の願いと祈りによって生まれ、呪いによって強化された存在。それが君だ。」…コイツ何いってんだ？

おはようございます。ジルです。

あのあとマミの監視も自分の狩りも大変不都合なくやれております。

昨晩は、さやかが落ち込んだり、恋バナしているのがなんとなく印象的だったようですね。

あー

そっか寝取られ見てればよかった。

あと、ほむらは次回から単独で動くようだ。

たぶんワルプルギスの夜の方準備したり、まどかの方フォローしているんだろう。

「ねえ」

「何かな？」

マミさんの家で、朝ご飯と牛乳2リットルを飲み干したところで話しかけられた。

「なんで、そんなに牛乳を？」

「今更？」

そう。実は毎日牛乳を5～6リットルくらい飲んでいる。

朝昼夕晩1～2本。

「……背とか、胸とか気にしているのかな？って」

「…」

いや、私でなければすごい怒っていただろう。

別に胸はこのサイズでも至高だし、成長しきったジルのも究極である。

背には特段コンプレックスはない。成長しきった自分も、今の自分も大変かわいい。うむ可愛い。最高だ……

っと、自己陶酔はやめておこう。

「いいかなマミ。
私は吸血鬼だ。それは知っているね？」
「ええ。」
「吸血鬼の食事はその名の通り、血だ。だが、魔女からは取れない」
「え？そうなの？」
「あれは命というか、エネルギーの吸収がメインだからね。」
「へぇ…」
「ゆえに血が必要な訳だ。
吸血鬼であるがゆえに。
まあ、そのせいで、マスケット撃たれるわ、剣を向けられるわ大変なわけだが」
「うぐっ……」
「さて、そこで牛乳なのだが…知っているかね。
牛乳…乳は血からできているのだ。
つまり、血から精製され、飲みやすく胃や腸から吸収されやすい形に変えたもの。
それがミルクなのだ。」
「ええっ！」
「つまり、吸血鬼の吸血衝動は牛乳で治まる！」
「えええええええ!!!」
「つまり、血を吸う。食事なのである。」
「そうだったのね、勘違いしちゃったわ」
「うむ。勘違いするのは仕方ない話だ。気にしないのでそちらも気にしないでほしい。」
「わかったわ」
うむうむ。
納得したな。
さーて、こんな嘘まみれの与太話、いつまで信じるかなぁ。
単純に牛乳が好きなだけなんだよね。
だいたい魔王にそんな衝動無いし、食事も実は摂らなくても生きていられる。

はーしかし、まさしく茶番。コレ、カットしても問題ないシーンだよね。

そんな訳で、今日も今日とてマミと家で分かれて、魔女狩りだ。

ちょいちょい遠くの魔女を狩って、魔女結界が崩壊。グリーフシードを拾ってステルス使う流れなのだが、グリーフシードを拾う段階で、弓攻撃である。

え？まどか？

とか思ったが違った。

誰だ？見たこともない魔法少女だが。

「見つけたぞ！狩場あらしの吸血鬼め！」

あら、有名人？

「何の用事だろう？」

「ハッ!!

いままで散々魔女を横取りしておいて、そんな事を言うんだ。」

「別に横取りなんてしていないのだが」

会話の途中で　ピューイ　と甲高い音。笛？口笛か？

それに合わせて魔法少女が弓を番える。

身構えるも、その時地面が割れる。

なんと？

弓使いの魔法少女は拘束系統の弓なのか、落下する私と地面に張り付ける。

服が!!!

なるほど、考えた。

落下中なら回避行動は取れない…。

そして貼り付けも行動阻害。

となれば本命が…来た！

デカイハンマー持った魔法少女が真上からソレを振り下ろす。

うおーーーー

なんというか対人用コンボだね。

無敵結界は使ってないので、ダメージがーー！
ああ、２００も食らってしまった！
……２００Ｍじゃないよ、２００ね。
ああ痛い…（ちょっぴり）
とりあえず、ビルの地下まで貫通しクレーターすら作った。
いや、びっくり。
「へえ、吸血鬼っていうから、霧になって逃げたり、コウモリになると思ってた。」
ハンマーをどかすと周囲が水のカーテンで覆われていた。
３人めの魔法少女。床を崩したのもこいつかな？
「別に吸血鬼だからって、霧になるのもコウモリになるのも無い。どこの迷信？」
「そりゃあそうよね。
キュゥべえが、魔女を狩ったらすぐに姿を消すと言っていたから、てっきりね。」
じわりじわりと水の膜が迫りくる。
で？それで？
起き上がると理解不能という表情を見せる。
ムッとした、水使いの魔法少女は水を刃に変え、攻撃する。
ほう、そんな風に攻撃するのか。なんか残念な気がしなくもない。
避けられているのに腹を立てたのか、水で私を押しつぶす。
全周からやられたら避ける間もない。
でも、水の中に入っただけ。
で？
「くらええーーーーー!!」
４人目の魔法少女か！
エフェクト付きの雷撃攻撃で、ほう、感電させるのか。
で、全員引いていく。
ん？
―３５９
そして大爆発したった。

ああ、水の電気分解と、水素爆発ですね。耳が痛いし、服が…。
ようやるね。
グリーフシードとか置いてきてて良かった。ああ念の為に持ち歩いてる2個はある。
片手に持ってます。
が、ソレ以外が一切合切吹き飛んだ。
全裸である。
…あ、旧ジルの時散々裸だったから恥ずかしくない。
ただ、問題が一つある。

マミのスマホが吹き飛んだ！
なんて奴らだ!!
あーあとでマミに怒られる。
「やったか？」
「いや、それ駄目でしょ。言ったら。」
「え？なんで？」
「やってないフラグだよ、禁句だよ？」
煙の向こうから、そんな掛け合いが聞こえる。
なかなか愉快な奴らのようだ。
しかし、まさか、私のほうがやったかを言われる事になるとは…いやそうか、私はそっち側か。
うーん。倒れておこうかな？
その方が面白そうな事が聞けそう。
イイネ！じゃ倒れます。
ヤムチャしやがって！な格好でな!!!
煙が晴れると、どっと湧き出し、近づいてくる。
「やってるじゃない！」
「ほっ」
「いやーうまく行ったね。」
「うんうん」
まあ、かなり殺意高めのコンボで固めて来ましたからね。

「ハンマーで叩いても元気に意識あったからね。
硬い硬いって言われてたけど、ほんと硬かった。」
「だからこそ電撃からの水爆で良かったよね。」
「まーあのコンボ食らって死ななかった魔女いないしなー」
「で、キュゥべえ、コイツがそこらの魔女倒して、私達から魔女を横取りしてたやつ？で合ってるよね？
最初確認せず殴ったけど。」
「ユミ！油断しないで！まだそいつの意識あるよ！」
チッ、キュゥべえめ。余計なことを。
「え？」
ばっと起き上がりしま、ユミと言われた魔法少女の後ろにまわり頭を強撃。
はい、脳震盪と。
「…」
「あ！」
「ユミ！くっそーーーーー！」
バリバリと雷使いが仲間が居るにも関わらず雷撃を放ってきた。
魔法の雷撃より威力はあるが、速度が甘い。
なんで光速に近くないのだろうね。
ということで、咄嗟に避けれました。
雷使いは置いといて、ハンマー使いと水使いの背後に回り込み…
おお、反応できたの雷使いだけか。
で、同じく脳震盪ってことで頭ガツーン。
「くっ、うおおおおおぉぉぉぉぉぉぉ――――！」
眩しい。
って、いうかこのエリアを雷撃で満たしているみたいだな。魔力使い過ぎでは？
「死ねえええええぇぇぇぇぇぇぇえええ!!!」
ちょっとずつダメージ蓄積するので、見えないながらも真後ろに周り、ガツーンと一発。
それで気を失って倒れた。

うん。戦闘下手だわ。自分。
「…で、キュゥべえさん。これは一体何かな。」
呼びかけると、白いのが瓦礫の隙間から現れる。
「まさか、この魔法少女４人を倒せるとは思いもしなかったよ。」
「えらく素直に認めるね。」
「僕もこの結果は想定外だ。確かに強いとは思っていたが、ここまで魔法少女を圧倒できるとは思いもしなかった。
やはり君は極めつけのイレギュラーだね。」
「……特に敵対はしていなかったと思ったのだが。
お前は一体何に対して興味をそそられたのかな。」
「僕らは当初、魔法少女の祈りから生まれた別の存在であると仮定していたんだ。
だからこそ、その魔力でその防御力。ダメージがあるはずなのにまるで堪えた様子もない。
そして、学校の上で見せた時間を操る魔法。
これらを複合して考えた時、別の時間軸で君が作られ、過去に送られた。
であるなら、君の存在は自明だ。魔法少女によって作られた存在。
それが君だ。
魔法少女の願いと祈りによって生まれ、呪いによって強化された存在。
それならこの強さも頷ける。
そして君が何を求めてこの時間軸で過ごすのかが謎だったけど、こうまで魔女を狩る理由は君が魔女を殺す存在として定義されていたからじゃないかな。」
ハイ。キュゥべえの推理推論長文でした。なげえよ！
「残念。ハズレ。
でも正解を言うつもりはないよ。」
「そうか、…それは残念だ。」
全然残念そうじゃない…
はっ？待て何だこれ？

ＨＰがものすごい勢いで回復している…２億回復した…だと!?
重衰弱が解けて衰弱状態。全能力値―５０％
体が軽い…。こんな気持でって言うとフラグだけどなんぞ？
「…!!
君は一体……」
おや、キュゥべえも気付いたか。
そうなんです。希望と絶望の相転移。そのパワーの回収。
キュゥべえ達から横取りしてみた。
魔女一体の穢れが１００万回復だとすると、魔法少女の絶望パワーは２億。
ハッ！
魔女なんかお話になりませんな!!!
コレあと４人くらい絶望してもらったら直ぐに全快するんじゃないか？
「やはり君は危険な存在だね。
まさかこんな方法があるなんて。」
「私にちょっかいをかけたのだ。当然だろう。放っておけばよかったのだ。」
キュゥべえを一瞥すると立ち去ろうとする……ん？
「でも、念の為保険をかけといてよかったよ。」
空間が歪んでいるように見える。
いや分かるぞ。異界を移動する術を心得ていいるからわかる。
ククク。こいつ空間隔離するつもりだ。
「君はこの宇宙に居てはいけない存在だ。だから、この空間の狭間に消えてなくなるといい。」
「なるほど、やけに饒舌だったのは時間稼ぎ…か。」
「そうだよ。
もう、ここまで来たら誰も止められないからね。」
「それこそ、神か何かでかければ――か？」
「!!
まあ、そんな存在が居たら、そうだね。

それくらい出来なければおかしい。」
「それにしても、魔法少女４人を犠牲に私を倒すとか、釣り合いとれているのかどうか。」
「今しがた、魔法少女の魔女化に関わる力を横取りするのを見て君が危険なのははっきり思い知ったよ。
君は今ここで消え去るべきなんだ。」
「ふーん。」
なお、この空間お歪みですが片手間で直せます。
どうしよう、あのドヤ顔。殴りたい。
「終わりまで、あと２０分ってところかな。
そこで聞いてみたいんだが…結局のところ、君の目的は一体なんだったんだい？」
ここで、壮大なホラを吹いたところでキュゥべえだしな。
今も情報がリンクされていないとも限らないし。
「うむ。……徹頭徹尾嘘はついてないのだけど。
休養だ。
体力がダウンして衰弱状態だった。
そして吸血鬼の休養は血で、命だ。
とりわけ吸収効率が良かったのが魔女だった。」
「……え？」
おっ、キュゥべえに　え？　って言わせてみた。
「……本当に…休養…だったのかい？」
「まあ、攻撃されたら、火の粉は払わないといけないからな。」
「…なんてことだ、だとしたら僕らは少し対応を誤った。
でも、魔女化の力を横取りするような君は、やはり危険な存在だ。結論は変わらないだろう。」
「もし…もし仮にだ。
このような空間を脱することができる程だとしたら、次はどうするつもりだった？」
「君がこの空間を抜け出せたら？という推論に意味があるとは思えないけど、そうだね。

もし君がこの空間から抜け出せたら、今度はこの星を破壊するなりして対処しなきゃいけないかな。」
「……」
え、どうしよう。この星ピンチな件。
それはイカンだろう。
仕方ないここは譲歩するか。
「コミュニケーションは大事だと思うんだ。何も星を壊さなくても良いと思う。」
「ただの推論にしか過ぎないのに、何を言っているんだい？」
「キュウべえ。お前は他の端末に、今もつながっているか？」
「!?
驚いた。僕らが複数いると理解していたんだね。
そうだね。今もこの会話をモニタリングしているよ。
それこそ、空間が壊れるその時までね。」
「じゃあ、交渉だ。
もしも、私がここから抜け出せたら、もう魔女化の力は横取りしない。
グリーフシードは他の魔法少女に譲る。
だから星は破壊しないでくれ。」
「……まさか、そんなこともできるのかい？」
「おや？気付いたか。」
「そんな交渉をするのなら、つまりこの空間崩壊は意味を成さないという事だ。
だけど、今後交渉として不干渉を貫くと言うならそれはそれで成立しうる話だ。」
「自分としては、この星が無くなろうが問題は発生しないが、休養の地が無くなるのは面倒だからね。」
「……分かった。
相互不干渉という辺りが落としどころだろう。」
私が手を振るとパリンと空間の歪みは正される。
重衰弱解けて、少し楽になったからね。

「さて、もう少し相互不干渉について、詰めようじゃないか。」
「確かに。今も巴マミが復活するなんて想定外の事が起きている。
誰が手を下したのか想像に難くない。」
いや、アレ手助けはしたけど自分でやってたよ？
「じゃあ、交渉を始めようか。」
何故か地球の存亡がかかった交渉が始まってしまった。
だから宇宙文明は嫌いだ。

１２．「条件４・今より一週間、別の地域で休養できる環境を整えるので、そこで休養し、そこから出ない。ステルス化もしない。」ほう、本編に関わるなと言うことか

こんばんは、キュゥべえと協定を結んでしまったジルさんですよ。
まあ、よく考えたら、まどかの魔女化を以て手仕舞いにするつもりのキュゥべえと、まどかのアルティメット化を以て手仕舞いにするつもりの私がお互いに、協定反故を前提とした協定を結んでいるという滑稽な状況ですね。

キュゥべえは隠しているけど、まどかの魔女化エネルギーの回収が現在の目標で、恐らくそれで地球が滅ぶだろう事も計算のうちに入れているでしょう。
だけど、そこで横取りできる奴が居た。
まどかの魔女化エネルギーを横取りされたくないキュゥべえは、こちらに枷を強いてくるわけだ。

元々、横取りされなくてもこちらを殺そうとして来たのは、グリーフシードの再利用化で魔法少女が魔女にならなくなる事が懸念された。
それで私を空間ごと切り離すことで宇宙から消滅させ、懸念事項を解消させようとした。
そう、魔法少女が魔女化しなくなる＝魔女化エネルギーが確保できなくなる為に消しにかかった。
だけど、魔女化しても横取りされる。
コレをもし全ての魔法少女にされた場合、白いのにとっては悪夢でしかなくなるだろう。
やれるかどうかではない。白いのにとっては1件でも実現できるという事は、現存する全ての魔法少女に横取りを展開するというのは

当然実施される事だと思っている。
なぜなら、白いのが私と同じ状況だった場合は躊躇なくそれを選択するからだ。
そうなれば、この星から手を引く事も吝かではないが、別の星（牧場）も同様に魔女化エネルギーを回収される可能性が出てくる。
それなら私をこの星ごと消し去るというのも、オプションの一つとして考えているだろう。
他に手立てが無いなら、手仕舞いした上で消す可能性もあるだろう。

今回の件を考えるならば、要するに相手をどのように脅威に感じるか、だ。
自分は白いのを恒星間航行可能な宇宙文明であり、当然複数の星系を実効支配または監視下に置いているだろうと考えている。
他の宇宙文明が居ることを示唆していたから、防衛戦力もあるだろう。
正直規模が読めない。
逆に白いのは私をどのように脅威に感じているだろうか。
そう考えた時、最初はさして脅威に感じなかったが、グリーフシードの浄化で牧場を荒らす害獣程度には認識しただろう。
害獣は駆除する。当然の行動だ。
そこへ新たな脅威として、その害獣は魔女化エネルギーの簒奪も可能となった。
これは最早害獣レベルではない。この星のエネルギー回収事業の進退にまで発展する事態となった筈だ。
更に、死んだはずの魔法少女が蘇っているとなれば脅威レベルをどれだけ引き上げたか……。
あの空間隔離は、白いのにとってはネズミ捕りあたりの対応だったかも知れないが、あそこまで空間崩壊が進行すれば撤回は出来ないと言っていた。
となれば私は白いのにとってめでたく対処すべき問題か、敵として

捉えられた筈だ。
特に情報が少ないまま手を出したのは、彼らにとっては失敗だった。
だが、まどかのプロジェクト前にできるだけ想定外のことを取り除きたかったのだろう。
さやかが持ち直したのは、そんな想定外の一手だったのではないだろうか。
白いのは思い直し、敵対したなら早急に駆除または制御したいと考えるだろう。たぶん。
できるなら情報を集めたい。見に徹したい。観測したい。
本来なら今の段階は、そうだと思う。
そこで思いもかけず協定話が持ち上がった。
信頼できるかどうかは別として、会話の窓口さえできてしまえば観測できる。
まどかの件が無ければ、情報を集め干渉実験を繰り返し、最終的に克服するようにもっていくだろう。
だが、まどかの魔女化エネルギーは、この牧場一つ潰しても十分にお釣りが出ると試算は出ているはず。
だとすれば、会話と協約によってまどかから遠ざける。
どうせこの星とともに私も滅ぶだろうと思っているのだ。いくらでも言える。
だから、
1．今後一切の魔女化エネルギーの横取りを禁止する。
2．今後一切のグリーフシードの浄化はしない。
3．魔女との戦いは禁止しないがグリーフシードはキュウベえに渡す。
4．今より一週間、別の地域で休養できる環境を整えるので、そこで休養し、そこから出ない。ステルス化もしない。
という条件が、白いのから出るのだ。
特に4番は、余程まどかに接触させたくないらしい。
私からは、『既に組み込み済みのエネルギー回収先変更プログラム

は解除できない。これ以上はやらないので、そこは大目に見て欲しい。』

この様に言い、その他は1～4を受諾する代わりに魔法少女の血を定期的に頂きたい旨を交渉したが、それはできないそうだった。

ならばと回収済みのグリーフシードを定期的に寄越すように交渉。

一週間に1つという事で合意した。

キュゥべえも、まどかに手を出されないならと合意したのだろう。

まあ、既にまどかには貼り付けてあるんですけどね。魔女化エネルギー回収魔法。

まさか、魔法少女になる前から貼り付けているとは思うまい。

ククク。

後、マミ達にお別れの挨拶くらいさせてくれと言ったら、マミだけならＯＫがでた。

ここでも、まどかには会わせたく無いらしい。

ふん、無駄なことを。

ああ、あと服を寄越せ。裸なんだよ。見てわからないか？

そんなこんなで、休養先はハワイである。

安直だが、まあ…寒いよりは良いな。

あと魔女の発生率が低く、魔法少女も1人しか居ない。

いい環境らしい。

ああ、横取りされる心配が少なくて良い環境なんだろうな。

移動は飛行機。

飛行機撃ち落としても良いぞ、協定を反故にするならな！って言ってある。

最後にマミに会う。

どっかの公園で、キュゥべえ経由で落ち合った。

これが終わったらハワイに連行されるワケである。

で…なんでなの？

「ふむ、マミ…なぜ…銃を向けているのかな？」
いや、ほんとなんで？
「……なぜ、美樹さんの変身した魔女が人魚だと知っていたの？」
ｏｈ・・・ ヤバい。
ああ、ヤバいヤバい。
想定外だ。この程度も想定できないとか、自分の推理力全然駄目なんじゃ？
「なんで、魔法少女が、魔女になる事を…黙っていたの？」
ぬおおお！
なんてこった。
なんて答えよう。
まー表情筋は困ったときでも反応しないいいヤツなので、たいへん助かっている。
「まず、魔女が何処から来るか考えたことはあったかな？
……
…（うん。質問に質問で返すなってか？）…
……
いろんな魔女が居たね。
なんでこんな魔女なんだろうって考えた。
やけに個性がある。
なら、『一体なにを元にした個性なのか』と疑問に思うはずだ。
ああ、キュゥべえに聞いていないというのも一つの理由だ。
奴ははぐらかすからな。
で、次に魔女になりうる元についても考えた。
人間から魔女に？
穢れが使い魔になって魔女に？
それもあるだろうが、一つだけ、人間より魔女になりうる素養がある存在があるじゃないか。
まあ、推論でしかないがソレで十分だし追求するのも藪蛇だ。
」

…うーんとマミは考えて、続きを促した。
宝石マミよりやっかいだな。
ハイハイって聞き流せないのだから。
まあ喧嘩別れに終わっても別にいいがね。

「で、その後、さやかの性格からグリーフシードが濁りやすそうだった。
限界を超えたら…どうなるのか考えた時、その中の魔力を調べた。
そしたら人魚の影が見えたんだ。
だから、なるなら人魚の魔女になるんだろうなって。」
そこでマミはうんうんと頷き、ニッコリと笑って…
パーン
と眉間を撃って…え？ナンデ？
「ちょ、どういうこと!?」
「推理したり、魔力を調べたなら言ってほしかったわ。」
「え、いや今撃ったよね？」
「確かに、私は口やかましくて面倒に見えたかもしれないけど、真実を受け入れる覚悟は出来ていたわ。」
「え、撃ったよね？あれ？どういうこと？なんで？」
「もうちょっと、私を信頼して欲しいのだけど。」
「撃ったよね？ねえねえなんで撃ったの？」
「一発くらいなら挨拶みたいなもんでしょう？」
「そんな挨拶無いよ！
え？どうして？ナンデ？」
「だって撃ったって無傷じゃない。今も。」
「痛いからね？本当に。痛いからね？マジで。」
「まあ、だから撃っても大丈夫かなって。」
「大丈夫じゃないよ？いや本当に大丈夫じゃないよ？」
大丈夫だけどさ。
「あと、ちょっとイラってきたから。」
イラっ…って。

無差別銃撃娘になってしまったのだろうか。
「まあ、いい。
マミさん。ちょいと一週間ほど私は旅に出る。
キュウベえに交換条件でな。」
「キュウベえに？」
「そそ、まあナンデかはキュウベえに聞いてくれ。
適当な言い訳が聞けるぞ。」
「……言い訳なのね。」
「じゃあ、まあ…そんな挨拶がしたかっただけだ。」
「そう、一週間後には戻ってくるのね？」
「まあ、そのつもりではある。」
「寂しくなるわね。」
ハッハッハ。ボッチには辛いか？
まあ、もしかしたら二度と会うこともあるまいが…ああ、煩い記憶しかないな。
やれやれ。
私は手を振って立ち去る。
「じゃあね」
「ええ、またね」
シャフ度で一度チラミして、角を曲がる。
うん完璧。
まー私はまどかのアルティメット化を目指している。
魔女化してもアルティメット化しても魔女化エネルギーは横取りだが。
時間軸とかの干渉を考えるとアルティメット化したエネルギー横取りしてとんずらするのが一番効率的だろう。
結末はアレだが、世界が改竄されるなら安心して見ていられる。
ハッピーではないがベターな結末。
その上エネルギーは頂ける。キュウベえの記憶には残らない。
唯一残るとすれば、ほむらだけ。
完璧だ。

パーフェクトすぎる。
さすがジル脳。回転が早い。
ククク。
あー、あとはのんびりバカンスして休憩しようかねぇ。

『魔法生成生物についての報告書Ｎｏ．８』

～インキュベーターの主星視点～

【Ｓｏｌ星系の感情エネルギー回収事業をしている、Ｂ９６８２集合意識群体からの報告】

集合意識であっても、端末体と操作体、情報処理体等があり、全ての行動が一つの意識決定によって管理されるには数が多すぎる。その為、群体として自我の並列化により情報が整理されている。

端末体が歩く走る等の意識をすべてを、すべての個体が共有できるわけもなく、また無駄な行為であるため、自我が一つで、末端の行動は末端の意識で処理される。

そうなると情報の伝達についても、集積する場所と処理する場所が必要となる。

また、星系間は距離が離れすぎているため、自我情報の伝達には遅延が発生する。

そのため、自我範囲を星系内に留め、中央へ伝達する事で同期している。この星系内自我を群体と呼び、魔法少女孵化（ぼくじょうか）による感情エネルギー回収事業を成している。

このように中央自我では雑多な情報整理だが、ここでは上げられた情報をもとに分類と整理を行う部署である。

気にしなくて良い些事なのか、重要事項なのかを判別する。

そんな情報の海の中で、今も一つ案件が流されてきた。

『魔法生成生物についての報告書Ｎｏ．８』

この星域では珍しい魔法生成生物の８体目の報告である。

Ｎ１８５９０―２０―１１　１３１５５９に、存在を確認。

１．

使い魔結界の中で不思議な固体を発見。相当攻撃を受けていた様だがダメージはない模様。

手足が魔女に酷似した波長を放っているため、継続観察を開始する。

尚本件は魔法生成生物の可能性がある。

2.

魔女と違い会話可能。また飲食と睡眠は通常通り。

ただし、排泄する気配が無い為、人形である可能性もあり。

本体の方は魔力を封じているような防壁を確認しているため、意図的に魔力を隠蔽している。

グリーフシード及びソウルジェムが発見されない為、魔法少女でも無い事を確認。

3.

現地魔法少女＝［ＩＤ：３９７７８８４］（以降［マミ］と記載）による魔女狩り体験ツアーにて、サーチ型魔法の発動を確認。

首都圏全域を検索している事から、かなりの実力者ではないかと推測。

実力を知るため、どうにか現地魔法少女か魔女とぶつけてみたい。

4.

魔女結界に入ったところで魔女まで直送した結果、あっさりと魔女に捕獲される。

しかし非常に硬く、魔女の攻撃を受け続けていたが、傷一つついていない模様。

最後に穢を含む全ての魔力を魔女から吸収した。

穢チェッカーにて計測した所、魔女から吸収した以上の穢れがあり、何時呪いとなって出現してもおかしくない濃度である。ただし、当人も周囲にも穢による影響は見られない。

更に［マミ］の攻撃を受けたが防御を貫通した様子は無かった。

5.

端末にて接触するも情報収集は不発。

ただしＳＮＳ等操作に淀みがないことから、当地文明レベルの機器に対しての習熟がある模様。

書き込み内容は真摯に現状の解決方法を問いかけている事から、本人には周囲を穏便に済ませようという、性格タイプ＝［００９５］に

該当するのではないかと推し量っている。
更に、当地イレギュラー魔法少女＝［ＩＤ不明］と接触。（以降本人の自称より、［ほむら］と記載）
会話の内容及び、時空震が観測された為時間遡行者と仮定する。
これは［ほむら］も同様な模様、こちらについては【当地イレギュラー魔法少女の報告】にて記載。
６．
現地魔法少女＝［ＩＤ：３９７５０９４］と接触。（以降［きょうこ］と記載）
グリーフシードからも穢を採取を確認。グリーグシードから穢を吸うことでグリーフシードを浄化している模様。
だが対象に穢が移っているだけのため総量は変わらず。ただし溜まっている穢が魔女１０体分あり。通常の規定を超える。（※規定を超えると魔女化するか発狂する）
７．
当該対象をロスト。
何かしら移動したか、ステルス化を行っている模様。
全域スキャンをした結果発見できなかったが、スキャン拠点の幾つかが反応ロストしている事から、ロスト地域である死亡した［マミ］の住居に居ると思われる。
内部への干渉は、相手に不要な反応を引き出す恐れがあり、接触せず調査する。
８．
玄関付近にて当該対象の臭気を確認。
頻繁に出入りしている様子。継続観察する。
超光速レーダーと空間湾曲レーダーに反応があり、単純に対策し忘れたか、恒星間航行可能な技術力は持たない可能性があり、おそらく後者であろうと断定。
これより現地発生の魔法生命体であると断定する。
９．

当該固体が魔女結界に出現した為報告。（以降本人の自称により［ジル］と記載）

魔法攻撃らしきものを確認。通常の魔法少女に比べ数倍の威力の攻撃をばら撒いていたため、攻撃力も非常に高い模様。

また、攻撃に対して非常に反応が鈍く、傷もつかず、当たっても痛みを感じていない。

単純に効果が無いため痛みを感じず、驚異となる攻撃が無い為反応が鈍いと推察される。

［ジル］は魔女から穢と魔力を吸い出しており、自称していた吸血鬼の様相には近いと思われる。

吸血鬼としての伝承的設定である日光や十字架に無反応。接触しても何ら問題なく、ニンニク入りラーメンを購入していることから弱点に関しては当てはまらない。

そのため単純に血を吸う魔法生物であると定義する。

１０．

９の観測以降、魔女結界にだけ出現するようになり、累計５件の魔女を討伐。グリーフシードを持ち去っている。

その後［ほむら］と接触。グリーフシードの交換と浄化を行っていた。

基本的に当該地域＝地域名「見滝原」を中心に活動しており、その活動範囲は広い。

茶番を見破った［ほむら］との会話から推測するに、グリーフシード浄化を事業として展開する可能性があり、排除すべき対象として認める。

１１．

想定の流れではないが、「鹿目まどか」に対する魔法少女勧誘について

魔女化処理にて魔法少女化する予定だった、魔法少女＝［ＩＤ：４０１００４２］のメンタルが持ち直してしまった様だ。（以降、［さやか］と記載する）

会話と感情生物データベースからの推測では、より不幸な者を見て安心する感情行動と思われる。
それ以降「鹿目まどか」に対する接触は無い事から、偶発的な接触と類推する。
しかし活動エリアがかぶっており、早期の排除が望ましい。
１２．
１１以降、２２回の魔女及び使い魔への襲撃から、魔女狩りを目的としているのではないかと疑義がある。
しかし、魔女に対する感情的な行動が欠如しているとデータベースでは照合されたため目的は違う様に推測する。
計測結果、穢れは既に魔女２０００体分にも達しており、コレが呪いを生めば当該列島全体を汚染する事になると推測する。
［ジル］側の精神の変調があってもおかしくない筈だが、そのような兆しは見られない。
１３．
倒した数量と計算に合わない穢の増幅度具合は、穢が爆発した場合、当該地域の列島が崩壊するレベルであり、早急に対処が必要。
空間崩壊による消滅処分とする。
１４．
消滅処分失敗。
対象は空間を制御でき、魔女化エネルギーすらも簒奪している事が判明した。
当該簒奪エネルギーを鑑みた所、その呪いが暴発した場合、大陸一個分が崩壊するだろう試算。現在も、漏れ出ていないのが不思議レベル。
ただし、現在も変調が訪れない事から、穢に対する許容量は相当あると推察される。
会話及びブラフにより協定を締結できた。
また当該対象の穢をコレ以上の悪化を起こさせない処理が必要になった為、離島へ隔離する事とする。「鹿目まどか魔女化計画」の完遂を以て当該惑星への干渉を引き上げる事もあり、交渉にて離島隔離が

出来たことは存外望ましい結果と言える。